

アルザス・ドイツ語による  
『フラッシュェプツァー教授のジョーク集』  
— 訳と注解 —

Kommentare und Übersetzungen von 25 elsässischen Witzen aus  
“D’Lächkür vum Profässer Fläscheputzer sine 500 beschte Witz”

柴 崎 隆

Takashi SHIBASAKI

序

今日のアルザス [ドイツ] 語の状況は決して楽観視できるものではない。アルザス地方をスイス方面へ南に下るに従って、この方言の存続が危ぶまれている現状はよく指摘されていることである。とりわけ上アルザス (=オ・ラン県) で最大の人口を持つミュルーズでは、1993年に教育委員会が実施したアンケートによるとすでに20年前に児童のわずか2%のみしか方言すなわちアルザス語の知識を有していないという報告もある。現代のアルザスを代表する作家アンドレ・ベックマンがまさに下記の詩 (北部アルザス方言) に詠むが如く、本来、ヨーロッパ大陸の二大文明、ドイツとフランスの橋渡しとしてのアルザス人の魂とみなされてきたこの方言が危機に瀕している現状を見逃すことはできない。

**Wer weiss, wi liëb e Liëdel esch, wann’r’s net senge kann?**

**Wer weiss, wi e Hiddel esch, wann’r’s net strachle kann?**

**Wer weiss, wi warm e Haemet esch, wann’r se net versteht?**

{Finck/Weckmann/Winter, S. 108}

歌われなくなれば、歌がどんなに愛しいのか誰が知ろうか。  
撫でられなくなれば、肌がどんなに柔らかいのか誰が知ろうか。  
理解されなくなれば、故郷がどんなに暖かいのか誰が知ろうか。

ここで取り上げる『フラッシュェプツァー教授のジョーク集 — 彼の500の最上の小話』(原題 D’Lächkür vum Profässer Fläscheputzer — sine 500 beschte Witz) は2003年に出版されたものであり、後書きにはフランス語の訳が付されているものの、本文は全てミュルーズ・アルザス語 (Elsäss’r Ditsch) のみの構成となっている。著者のフレディ・ヴィレンブーハー (Freddy Willenbacher) は、「二言語主義、すなわちアルザス語とフランス語の擁護者であり、それに加

えて才能ある無名の方言愛好家として、フレディ・ヴィレンブーハー以外には一般の人々の援助を勝ち得てきた人は他に多くはいなかった」(üsserem Freddy Willenbucher, als Verteidiger vu d'r Zweisprochikeit, also Elsässisch un Franzeesch, dr'züe begabter unbekannter Dialektfrind, sin nit vil andere do g'seh, wu d'allg' meineUnterstützung g'sichert hätte.) とこの本の発行者ピエール・ダデ(Pierre Dadez)に巻末の後書き(S. 282)で言わせしめるほどの逸材であるようだ。ちなみにフラッシュプツァー教授とはヴィレンブーハーのペンネームである。上アルザスにあたるオ・ラン県最大の都市ミュルーズ郊外のブルンシュタット(Brunstatt)に暮らす彼が世に出すアルザス語のジョーク集はどれも飛ぶような売れ行きを示し、方言消失の危機に瀕しているとまで言われているアルザス南部にあってもまだまだ希望があるのではとの期待感を抱かせる。ここでは27の小話を選び、行間逐語訳の体裁を取って( )の中に高地ドイツ標準語(Hochdeutsch/Standarddeutsch)訳を、さらにその下に詳細な注と日本語訳を付した。なお各話の右下に置かれた { } の中に原著のページを示す。

アルザス語 (Elsäss'r Ditsch) + 標準ドイツ語 (Standarddeutsch)

1. **D'r Benjamin<sup>1</sup> isch<sup>2</sup> nit ganz hall uf d'r Platte<sup>2</sup>**

(Benjamin ist nicht ganz hell auf der Platte)

**un begriff<sup>3</sup> e Sach e bizzele<sup>4</sup> schwa[h]r.**

(und begreift eine Sache ein bisschen schwer.)

**Doletscht<sup>5</sup> frogt'r sine Frau:**

(Letzthin fragt er seine Frau:)

— **Dü, Marie, was isch fir e Unterschid zwische <koschtelos> un <ummesunscht>?**

(— Du, Marie, was ist das für ein Unterschied zwischen kostenlos und umsonst?)

**Han die zwei Werter nit d'gliche<sup>6</sup> Beditung<sup>7</sup>?**

(Haben diese zwei Wörter nicht die gleiche Bedeutung?)

— **Nei Baschi<sup>8</sup>, gsihsch<sup>9</sup>, ich bin koschtelos in d'Schüele<sup>10</sup> gange<sup>11</sup>, un dü ummesunscht!**

(— Nein, Baschi, siehst du, ich bin kostenlos in die Schule gegangen, und du umsonst.)

{S.126 mitten}

注

- 1) **D'r Benjamin** : アルザス語を含む上部ドイツ諸方言では人名であっても通常は定冠詞と共に用いられる点で標準語とは大きく異なる。Benjamin は旧約聖書に基づく男性名。
- 2) **isch ... hall uf d'r Platte** : 標準ドイツ語の熟語 “hell auf der Platte sein “ (頭が良い) に相当。なお ischは中高ドイツ語 istの語末の -st がアルザス語を含むドイツ語圏南西部で -scht [ʃt]と変化した後に、語末の -t が脱落した形態であろう。
- 3) **begriff** : 新高ドイツ標準語の *begreift* に相当。中高ドイツ語の *begrifen* に直接に由来し、新高ドイツ語の î> ei [ai] への二重母音化を経ていないが、アルザス語では短母音化が生じている。

- 4) **e bizzate** : 新高標準ドイツ語の *ein bisschen* に相当する。Martin/Lienhart (Bd. II, S.127) では *bitzele*, *bitzi*。標準ドイツ語の指小辞 *-chen* はドイツ語圏南西部では一般に *-ele* となる。
- 5) **doletsch** : 新高標準ドイツ語の *letzthin* „つい先日“に相当する。(Martin/Lienhart, Bd. I, S.631) では, *do letst* と分離して表記されている。ここでも *-st- > -scht-* [ʃt] のドイツ語圏南西部の音変化が確認できる。
- 6) **glich** : 新高ドイツ標準語の *gleich* に相当。中高ドイツ語の *g[e]lich* に直接に由来し, バイエレン方言に端を発する新高ドイツ語の *i > ei* [ai] への二重母音化を経ていない。
- 7) **Beditung** : 新高ドイツ標準語の *Bedeutung* に相当。中高ドイツ語の *bediutunge* に直接に由来し, 新高ドイツ語(バイエレン方言起源)の *iu* [y:] > *eu* [œy] への二重母音化を経ていないが, アルザス語では *iu* [y:] > *i* [i:] への非円唇化が生じている。
- 8) **Baschi** : *Baschi* は本来“*Sebastian*“の愛称 (Suter, S.33)。おそらく [Se]bastian > *Basch*/tian) となった後に, 今日ではもはや生産的ではない指小辞 *-i* (*Heidi* を参照) が添加されたものであろう。こでも *-st- > -scht-* [ʃt] のドイツ語圏南西部の音変化が確認できる。
- 9) **gsihsch** : 新高ドイツ標準語の *siehist* [du] に相当。スイス・ドイツ語と同様にアルザス語でも接頭辞 *g-* が付加されている。直接法・2人称・単数の語尾 *-sch* に関しては上記の注2) を参照。
- 10) **Schüele** : 新高ドイツ標準語の *Schule* に相当。中高ドイツ語の *schuole* に直接に由来し, 新高ドイツ語(中部ドイツ語起源)の *uo > u* [u:] への単長母音化を経ていないが, アルザス語では *uo > üe* への前舌母音化が生じている。
- 11) **gange** : 新高ドイツ標準語の *gegangen* に相当。中高ドイツ語の過去分詞 *gegangen* に由来し, アレマン諸方言ではモーゼル・フランケン方言と同様に語末の *-n* の脱落が生じている。すでに中高ドイツ語時代に *g(e)gangen > ggangen > gangen* への変化が確認される。(Weinhold-Ehrismann-Moser, S.106, § 151)

## 日本語訳

ベンヤミンはそんなに頭が良くなって, 物事を理解するのが少しばかり難しい。この前彼は妻に尋ねました。

「ねえマリー。kostenlos と umsonst の違っていて何なんだい? 二つの単語は同じ意味ではないのかい?」

「いいえバッシ (ベンヤミンの愛称)。いい, 私は [注: 成績優秀のため, 奨学生として] タダで (kostenlos/koschtelos) 学校に行っていたけど, あんたは無駄に (umsonst/ummessunscht) 通ってたでしょ!」

## 2. Im Schnällzug „Strossburg<sup>1</sup> — Milhüse<sup>2</sup>“ sitzt d'r Franz<sup>3</sup>, in erschter Klass,

(Im Schnellzug „Strasbourg — Mulhouse“ sitzt Franz in erster Klasse)

un wie g'wehlig<sup>4</sup> hat àr kei Fahrkart g'numme<sup>5</sup>.

(und wie gewöhnlich hat er keine Fahrkarte genommen.)

Numme<sup>6</sup> das Mal<sup>7</sup> wird àr vum Controleur getappt<sup>8</sup>, ]

(Nur dieses Mal wird er vom Kontrolleur ertappt.)

**un wird ufg'fordert, sofort sine Reis z'bezahle,**

(und wird aufgefordert, sofort seine Reise zu bezahlen,

**inklüsiv d'Büess<sup>9</sup> fir's Mogle.**

(inklusive der Buße/der Strafe für das Mogeln.)

**D'r Franz fangt a<sup>10</sup> z' diskütiere , so dass d'r Beamte fangt a<sup>10</sup> z' drohe:**

(Franz fängt an zu diskutieren, so dass der Beamte fängt an zu drohen:)

« **Wenn Ihr<sup>11</sup> jetzt nit sofort bezahle,**

(Wenn Sie jetzt nicht sofort bezahlen,)

**no wirf<sup>12</sup> ich Eir Kuffer<sup>13</sup> eifach zum Fanschter üsse<sup>12</sup>, verstande? »**

(nun werfe ich Ihren Koffer einfach zum Fenster hinaus, verstanden?)

**No richtet sich d'r Franz an d' andere Mitreisende:**

(Nun richtet sich Franz an die anderen Mitreisenden:)

« **G'sahn'r<sup>14</sup>, wie harzlos da Mensch isch,**

(Sehen Sie, wie herzlos dieser Mensch ist: )

**dà dät<sup>15</sup> mi Kuffer zum Fanschter üsseboldere<sup>15</sup>**

(der wirft meinen Koffer zum Fenster hinaus)

**un so mi einziger Sunh ümbringe! »**

(und bringt so meinen einzigen Sohn um!)

{S.161 unten}

### 注

- 1) **Strossburg** : アルザス最大の都市。バ・ラン県, すなわち下アルザスの主都で, 欧州議  
会が置かれる。フランス語ではストラスブール (Strasbourg), ドイツ語ではシュトラ  
スブルク (Straßburg)。
- 2) **Milhüse** : 上アルザスすなわちオ・ラン県最大の都市。フランス語ではミュルーズ  
(Mulhouse), ドイツ語ではミュールハウゼン (Mühlhausen)。
- 3) **d'r Franz** : アルザス語を含む上部ドイツ諸方言では人名であっても通常は定冠詞と共に  
用いられる点で標準語とは大きく異なる。
- 4) **g'wehlig** : 新高標準ドイツ語の副詞 *gewöhnlich* に相当する。アルザス語ではö [ø:] > e [e:]  
への非円唇化が生じている。
- 5) **g'numme** : 新高ドイツ標準語の過去分詞 *genommen* に相当する。語幹母音の o > u の変  
化はアルザス語独自のものか? 他にも標準語の *von* は **vu** となる。
- 6) **numme** : 新高ドイツ標準語の *nur* に相当。中高ドイツ語の *niemer* (> 標準語 *nimmer*)  
の異形態 *nummê* に由来する。
- 7) **das Mal** : 新高ドイツ標準語の *dieses Mal* に相当。**das** はアルザス語では指示代名詞で  
ある。一方, 標準ドイツ語の定冠詞 *das* はアルザス語では **d's** となる。
- 8) **getappt** : 意味的に新高ドイツ標準語の過去分詞 *ertappt* に相当するが, アルザス語では

接頭辞なしでも“捕える”の意味で用いられる。(Martin/Lienhard, II, S.699)

- 9) **d' Büess** : 形態的に新高ドイツ標準語の *die Buße* に相当するが、ここではスイス・ドイツ語と同様に“罰金”を意味している。
- 10) **fängt a** : 新高ドイツ標準語の *fängt an* に相当。アレマン方言を含む上部ドイツ語では、中高ドイツ語の強変化第6類および第7類に起源を有する動詞で、標準ドイツ語と異なり直接法・現在・単数・2, 3人称形で語幹母音 *-a-* はウムラウトを生じさせない。また分離の接頭辞 *an* の語末の *-n* の脱落が生じている。
- 11) **Ihr** : 新高ドイツ標準語の人称代名詞 2人称・敬称・主格の *Sie* に相当。中高ドイツ語の敬称として用いられた2人称・複数の人称代名詞 *ihr* の直系である。
- 12) **wirf ich ... üsse** : 標準ドイツ語の “*werfe ich ... hinaus*” に相当する。分離の接頭辞 *üsse* [ysə] に関してはその構成が標準ドイツ語 *hinaus* (<中高ドイツ語 *hin + ûz*) とは逆で、中高ドイツ語の *ûz + hin* に由来する。
- 13) **Eir Kuffer** : 新高ドイツ標準語の *Ihr Koffer* に相当。ただしアルザス語の所有代名詞 **eir** は、その語形から中高ドイツ語の *iuwer* [y:wər] に遡るとは考えられず、むしろ新高ドイツ標準語の *Euer* [œyər, œyɐ] の非円唇化に基づくとみなすべきであろう。
- 14) **G'sàhn'r** : 形式的に新高ドイツ標準語の „*Seht ihr* “ に、意味的には „*Sehen Sie* “ に相当。スイス・ドイツ語と同様に、アルザス語でも動詞 „*sehen* “ は接頭辞 *g(e)-* を取り **g'sàh** となる。また主語 *ihr* は前接的に用いられる場合には *-r* と簡略化される。
- 15) **dà dāt ... üsseboldere** : 形式的に新高ドイツ標準語の „*der tut ... hinauspoltern*“ に、に相当。アクセントのない音節の連続を回避するため、特に *-ere, -ele* で終わる動詞の場合に助動詞 *düen* (=標準ドイツ語 *tun*) が用いられる。(Suter 1984, S.151 f.)

### 日本語訳

ストラスブールとミュルーズ間の急行列車の中の1等車にフランツが座って、いつものように切符を買っていません。今度だけは彼は検札係に取り押さえられ、キセル(無賃乗車)の罰金を含め、旅行代金をすぐに支払うよう要求されます。フランツが反論すると、その職員(=検札係)は脅します。

「あなたが今すぐに払わなければ、あなたのスーツケースを窓からさっさと投げ捨てますからね。分かりましたか？」

さてフランツは他の乗客たちに向かって[話を持ちかけます/こう言います]。

「この男がどんなに冷酷な人間かご覧になりましたか？ こいつは私のスーツケースを窓から投げ捨てて、私の一人息子を殺そうとするのですから。」

3. **Zwei Tierfrinde<sup>1</sup> unterhalte sich mi' nand<sup>2</sup>, do meint d'r einte<sup>3</sup>,**  
(Zwei Tierfreunde unterhalten sich miteinander: da meint der eine:)
- 《**Also, ich han dir<sup>4</sup> e gscheiter Hund<sup>5</sup>! Stell dir vor,**
- (Also, ich habe dir einen gescheiten Hund! Stell dir vor,)
- wenn mir dà z' morge friehj<sup>6</sup> üsselehn<sup>7</sup>,**

(wenn wir uns dann früh am Morgen hinauslehnen,)

**bringt àr mir zwei Zittunge<sup>8</sup> mit!**》.

(bringt er mir zwei Zeitungen mit!)

**No meint d'r ander 《So ebbis<sup>9</sup> kat<sup>10</sup> jeder Hund mache.》**

(Nun meint der andere: So etwas kann jeder Hund machen.)

**《Jà, jà, awer eins müss ich noch dr'züe sage,**

(— Ja, ja, aber eins muss ich noch dazu sagen,)

**mir sin<sup>11</sup> an keinere Zittung abonniert!》**

(wir sind auf keine Zeitung abonniert!)

{S. 163 unten}

### 注

- 1) **Tierfrinde** : 中高ドイツ語 vriend [fry:nt] は、アルザス語では非円唇化により [fri:nt] となった後にさらに短母音化と調音点の若干の下降により [fr̥int] となった。
- 2) **mit'nand** : 標準ドイツ語のmiteinanderに相当するが、語尾 -er の脱落によりむしろスイス・ドイツ語の mitenand (例 Grüezi mitenand!) に音韻的・形態的に近い。
- 3) **d'r einte** : 標準ドイツ語の der eine に相当するが、eint の語尾 -t は他の序数詞への類推から付加されたものとされている。(Martin/Lienhard, I, S.46を参照)
- 4) **dir** : ここでは "関心の与格" (ethischer Dativ) である。
- 5) **e g'scheiter Hund** : 標準ドイツ語の対格 (= 4格) einen gescheit~~en~~ Hundに相当。アルザス語では格の融合 (Kontraktion) が男性・単数形において標準ドイツ語以上に進み、アルザス語では主格 (= 1格) が対格の機能を引き継いだ。
- 6) **z'morge friehj** : 標準ドイツ語の früh am Morgen に相当。
- 7) **üsslehn** : 標準ドイツ語の hinaus|lehnenに相当する。分離の接頭辞 üsse [ysə] に関しては第2話の注12) を参照せよ。
- 8) **Zittunge** : 標準ドイツ語の Zeitungenに相当する。新高ドイツ語の i> ei [ai] への二重母音化を経ていないが、アルザス語では Zitt [tsit] (=標準ドイツ語 Zeit) と同様に i [i:]> i [i] への短母音化が生じている。なお、Zittung, Zeitung 共に、低地ドイツ語の tiding に由来する。
- 9) **So ebbis** : 標準ドイツ語の so etwas に相当。
- 10) **kat** : 標準ドイツ語の kannに相当するが、南部アルザス語では他の動詞からの類推により一部の話法の助動詞の3人称・単数・現在で語尾 -t が付加される。これに対して北部アルザス語では標準語と同じく kann となる。(Zeidler/Crévenat-Werner, S.69, S.72, S.84)
- 11) **mir sin** : 標準ドイツ語の wir sindに相当するが、アルザス語では中高ドイツ語の接続法1式に由来すると思われる wir sînに遡るのに対して、標準ドイツ語の sindは、本来は中高ドイツ語の直接法・現在・3人称・複数形他の sintが1人称・複数に進入したものである。(Weinhold-Ehrismann-Moser, S.117 f.)



### 日本語訳

二人の動物好きの男が一緒に話をしています。一人がこう言います。

「ねえ。僕は賢い犬を飼っているんだ！ いいかい (=思い浮かべてごらん)。僕ら夫婦が朝早く [窓から] 身を乗り出すと、そいつは僕のために新聞を2つも持ってきてくれるんだ！」

さてもう一人が言います。「そんなのどんな犬だってできるさ。」

「確かにね。でも一つまだ言わなきゃいけないのだけど、うちは新聞を取ってないんだよ！」

#### 4. — **Was isch<sup>1</sup>, Elisabeth? Bisch<sup>2</sup> das Johr<sup>3</sup> in Angland in de Ferie<sup>4</sup> g'si<sup>2</sup>?**

(—Was ist, Elisabeth? Warst du dieses Jahr in England auf Urlaub?)

— **Nei, mi Mann isch<sup>5</sup> während'm ganze Augscht<sup>6</sup> im Spital<sup>7</sup> g'läge<sup>5</sup>.**

(—Nein, mein Mann hat/ist während des ganzen August im Krankenhaus gelegen.)

— **Awer<sup>8</sup> nei, isch<sup>9</sup>'r krank g'si<sup>9</sup>?**

(—Aber nein! War er krank?)

— **Àr isch sàlwer<sup>10</sup> dra schuld, dà<sup>11</sup> Esel, wu-n-r<sup>12</sup> g'heert<sup>13</sup> hat, dass'me<sup>14</sup> in**

(—Er ist selber daran schuld, der Esel! Als er gehört hat, dass man in

**Angland links fahrt<sup>15</sup> uf de Strosse, dr'no hatt'r nit Besser's g'wisst<sup>16</sup>, as uf**

England auf der Straße links fährt, dann hat er nichts Besseres gewusst, als auf

**d'r Autobahn zwische Habse<sup>17</sup> un Bartne<sup>18</sup> geh trainiere<sup>19</sup> ...**

der Autobahn zwischen Habsheim und Bartenheim zu trainieren.)

{S. 65 unten}

### 注

- 1) **Was isch ?**: 標準ドイツ語の Was ist [los]? に相当。los は口語で省かれることがある。
- 2) **Bisch ... g'si?**: 標準ドイツ語の bist ...gewesen あるいは warst に相当する。直接法・2人称・単数の語尾 -sch に関しては第一話の注2) を参照。
- 3) **das Johr**: 意味的に標準ドイツ語の *dieses* Jahr に相当する。一方、標準ドイツ語の定冠詞 das はアルザス語では 's となる。
- 4) **in de Ferie**: 標準ドイツ語の Urlaub (会社や官公庁の休暇) に対して、スイス・ドイツ語と同様にアルザス語では Ferie を用いる。すなわち標準語のように Urlaub と Ferien の区別がない。
- 5) **isch ... g'läge**: 意味的に南部の標準ドイツ語の“hat ... gelegen“ に相当するが、動詞 liegen はドイツ語圏南部ではアルザス語も含めて完了の助動詞として一般に sein を取る。
- 6) **während'm ganze Augscht**: 標準ドイツ語の属格 (=2格) 支配の前置詞 während は、アルザス語では属格を消失してしまったため、代わりに与格 (=3格) を支配する。
- 7) **Spital**: 中高ドイツ語の spitál に由来し、現在ではドイツ語圏南部で Krankenhaus の代わりに日常的に用いられる。
- 8) **Awer**: 中高ドイツ語 aber に由来するが、両唇閉鎖音 -b- はアルザス語では母音間で唇歯摩擦音 w [v] に変化している。
- 9) **isch ... g'si?**: 標準ドイツ語の war は、南部アルザス語では総合時制としての過去形が完

全に失われてしまったため、分析的に“完了形式”によって示される。

- 10) **sälwer** : 形態的に標準ドイツ語の *selber* (< 中高ドイツ語 *sëlber*) に相当するが、中高ドイツ語の *e* [ɛ] は南部アルザス語では調音点が下がって *à* [a] となった。なお閉鎖音の *b* は母音間のみならず、流音と母音の間でも摩擦音 *-w-* へと変化した。
- 11) **dà** : 単数・男性・主格の定冠詞 *d'r* はアクセントがない弱形では *dà* [da] となる。
- 12) **wu-n-r** : 形態的には標準ドイツ語の *wo er*, 意味的には *wenn er* に相当するが、アルザス語としては *wu* と *àr* の母音接続 (Hiatus) を避けるために *-n-* が挿入された後に *-à-* が省略されたと考えられる。
- 13) **g'heert** : 形態的に標準ドイツ語の *gehört* に相当するが、アルザス語では非円唇化 (Entrundung) により *ö* [ø:] > *e* [e:] となった。
- 14) **me** : 中高ドイツ語の不定代名詞 *man* の弱形 *men* [mən] がアレマン方言に特徴的な語末の *-n* の脱落により生じた語形。
- 15) **fahrt** : 標準ドイツ語の *fährt* に相当。アレマン方言を含む上部ドイツ語では、中高ドイツ語の強変化第6類および第7類に起源を有する動詞で、標準ドイツ語と異なり直接法・現在・単数・2, 3人称形で語幹母音 *-a-* はウムラウトを生じさせない。
- 16) **g'wisst** : 形態的に標準ドイツ語の過去分詞 *gewusst* に相当するが、動詞 *wisse* (=標準語 *wissen*) は、アルザス語では語幹母音の均質化/平準化により完全な弱変化動詞となっている。
- 17) **Habse** : ミュルーズ東方の町 *Habsheim* のアルザス語形。なお規定語の *Habs-* は *Habicht* „大鷹”の縮約形。ハプスブルク家 (*Habsburg*) とその居城 *Habichtsburg* (スイス, アールガウ州) を参照せよ!
- 18) **Bartne** : ミュルーズとスイスのバーゼルの間にある町 *Bartenheim* のアルザス語形。
- 19) **geh trainiere** : 意味的に標準ドイツ語の *zu trainieren* に相当する。

### 日本語訳

「どうしたの。エリザベート。今年はイギリスで休暇を過ごしていたんでしょ？」

「いいえ。家のダンナが八月中ずっと病院に入院していたので。」

「おやまあ！ ダンナさん、病気だったの？」

「自業自得よ！あのトンマ(ばか)！ イギリスじゃあ左側通行だって聞いたので、ハプセ(=ハープスハイム)とバルトネ(=パールテンハイム)の間のアウトバーン(高速道路)で練習することよりも良いことは何にも知らなかったのだから(⇒思い浮かばなかったのだから)。

### 5. **Vorem G'richt<sup>1</sup> haltet<sup>2</sup> d'r Richter im Ageklagte vor<sup>2</sup> :**

(Vor dem Gericht hält der Richter dem Angeklagten vor:)

— **Sie han also e Portefeuille mit 2000 Euros g'funde**

(— Sie haben also eine Portefeuille mit 2.000 Euro gefunden

**un han's awer nit uf'm Fundbüro abgäh<sup>3</sup>. Das isch stroffbar!**

und haben sie aber nicht auf dem Fundbüro abgeben. Das ist strafbar!)



— **Herr Richter, sàller Tag<sup>4</sup> isch e Sunntig<sup>5</sup> g' seh.**

(— Herr Richter, dieser Tag ist ein Sonntag gewesen.)

**Un a' me Sunntig isch s' Fundbüro züe<sup>6</sup>.**

(Und am Sonntag ist das Fundbüro zu.)

— **Sie hätte's awer noch am Mântig kenne abgàh<sup>7</sup>!**

(— Sie hätten sie aber noch am Montag abgeben können!)

— **Das hat kei Zwäck g' ha. Am Mântig isch die Brieffäsche lààr<sup>8</sup> g' seh.**

(— Das hat keinen Zweck gehabt. Am Montag ist die Brieftasche leer gewesen.)

{S. 85 unten}

### 注

- 1) **Vorem G' richt** : 標準ドイツ語の vor dem Gericht に相当。アルザス語では単数・中性・与格 (= 3格) の定冠詞は [um] となり, em または im と表記される。
- 2) **hàltet ... vor** : 標準ドイツ語の hält... vor に相当。アレマン方言を含む上部ドイツ語では, 中高ドイツ語の強変化第6類および第7類に起源を有する動詞で, 標準ドイツ語と異なり直接法・現在・単数・2, 3人称形で語幹母音 -a- はウムラウトを生じさせない。さらに, 3人称においては語尾 -t の前に口調を整えるための -e- [ə] を挿入する点でも標準語とは異なっている。
- 3) **abgàh** : 標準ドイツ語の abgeben に相当するが, 中高ドイツ語の geben の語中の -b- が縮約 (Kontraktion) によりまず gèn になった後, 語末の -n の脱落も絡み, さらにアルザス語では語幹母音の調音点が下がり gâh [ga:] に変化している。ちなみに Willenbacher では gâh の現在人称語尾変化は下記のように活用する。

不定詞 : gâh / 過去分詞 : [ich ha ... ] gâh.		
現在 直接 法	ich gib ( < 中高独 gibe )	m' r
	dü gisch ( < 中高独 gîst )	ihr
	âr git ( < 中高独 gît )	si
		} gân
命令形・単数 : gib! / 命令形・複数 : gân!		

- 4) **sàller Tag** : 意味的に標準ドイツ語の jener Tag に相当する。なお sàller は selber に由来する。
- 5) **Sunntig** : 形態的・意味的に標準ドイツ語の Sonntag に相当するが, 語幹母音に関しては中高ドイツ語の suntag に直接に遡る。一方で新高ドイツ標準語 Sonntag の語幹母音 -o- は, 中部ドイツ語に基づく。
- 6) **züe** : 中高ドイツ語 zuo に由来するが, アルザス語では前舌音化により uo > üe に変化している。
- 7) **kenne abgâh** : 形態的・意味的に標準ドイツ語の abgeben können に相当するが, 動詞群においてアルザス語では標準ドイツ語とは異なり上位動詞 (ここでは話法の助動詞

können) は本動詞の不定詞に先行, すなわち左側に位置する。

- 8) **läär**: 中高ドイツ語 *läere, lêre*に由来するが, アルザス語では調音点が下がり à [a:] に変化している。

### 日本語訳

判決の前に裁判官は被告人をなじります。

「つまりあなたは2,000ユーロが入った財布を拾ったのに, 忘れ物センターに届けなかったのだね。それは犯罪だよ!」

「裁判官のセンセイ。その日は日曜日で, 日曜日には忘れ物センターは閉まっていたもんで。」

「でも月曜日にはそれを届けることができたのではないのかね。」

「そんなの意味ないっすよ。だって月曜日には財布は空っぽだったんですから。」

### 6. 'S Marigele<sup>1</sup> geht geh<sup>2</sup> bichte un maldet Herr Pfarrer, dass's<sup>3</sup> schwanger isch.

(Mariechen geht beichten und meldet Herrn Pfarrer, dass sie schwanger ist.)

— **Dü elände Sinderer<sup>4</sup> hasch<sup>5</sup> mindeschtens e Vater fir das Kind?**

(— Du elende Sünderin, hast du mindestens einen Vater für das Kind?)

— **Mache Eich<sup>6</sup> nur kei Sorge, Herr Pfarrer. 'S ist alles vorgsäh.**

(— Machen Sie sich nur keine Sorge, Herr Pfarrer. Das ist alles vorgesehen.)

**Un wenn'i<sup>7</sup> Zwilling bekumm, han'i<sup>7</sup> schu e zweiter Vater<sup>8</sup> in Resàrve.**

(Und wenn ich Zwillinge bekomme, habe ich schon einen zweiten Vater in Reserve.)

{S. 205 oben}

### 注

- 1) '**S Marigele**: 女性名 Marie に指小辞 -ele が付加されたもので, 標準ドイツ語の [das] Mariechen に相当する。語中の -g- は母音接続 (Hiatus) を回避するためと解される。なお, 上部ドイツ諸方言では人名であっても通常は定冠詞と共に用いられる点で標準語とは大きく異なる。
- 2) **geht geh** + **不定詞**: 動詞 *geh* (=標準語 *gehen*) を用い, “移動の目的”を示す不定詞の前に付加される不変化詞の *ge[h]* は一般に動詞の短縮形とみなされているが, 実は中高ドイツ語の前置詞 *gegen* の縮約 (Kontraktion) によって生じた *gên* に起源を有するそうである。(熊沢 2011, S.153)
- 3) **dass's**: 人称代名詞 's は先行する *s' Marigele* を受けるため *às* (=標準語 *es*) の省略形であり, *si* (=標準語 *sie*) のそれではないことに注意。
- 4) **Sinderer**: 標準ドイツ語の *Sünderin* に相当するが, アレマン方言としての語末の -n の脱落に先行する母音-i の曖昧母音 [ə] への弱化が伴い, さらには低地アレマン方言の特徴としての語幹母音の非円唇化 (Entrundung) を受けた語形。
- 5) **hasch**: 標準ドイツ語の *hast* [du] に相当するが, アレマン諸方言は低地ドイツ語諸方言等と同様に, 決定疑問文等で2人称・親称・人称代名詞の主語 *dü* が定動詞の後で省かれる。

- 6) **Mache Eich** : 本来のアルザス語における 2 人称敬称は、中高ドイツ語の伝統を引き継ぐ 2 人称複数人称代名詞の *ihr* である。さらにアルザス語を含む低地アレマン諸方言では動詞の現在・複数語尾として *-e* (またはアルザス中部で *-a*) という複数統一人称語尾を用いているため、標準ドイツ語の“*Machen Sie sich<sup>3</sup> keine Sorge!*“ は”*Mache Eich<sup>3</sup> ...* (= 文字どおりには *Macht euch<sup>3</sup> ...*) となる。なお注意しなければならないのは、アルザス語の *eich* 自体も標準ドイツ語 *euch* [œyç] の非円唇化 (Entrundung) した語形であり、中高ドイツ語の 3 格 *iu* [y:] の非円唇化した語形であるアルザス語本来の *i* [i:] とは出自が異なる。さらに、ここでは 2 人称の人称代名詞に関して非相互性が認められる点も忘れてはならない。すなわち、信徒である女性は敬称の“*Ihr*” で牧師に呼び掛けているのに対し、牧師はその女性に親称の“*dü*”を用いており、現代の一般的な慣用から見ると奇異に思われる。(トラッドギル 1974, p.118~121)
- 7) **i** : アルザス語の人称代名詞にはスイス・ドイツ語と同様に強形、基本形、弱形の区別があり、情報として重要度が高い場合には基本形 (*ich* [ix]) または強形 (*iich* [i:x]) を用いるが、それ以外では弱形 (*i* [i:, i]) が用いられる。また、語末子音 *-ch* の脱落に関しては中期英語の *ich* [iç] > *i* [i:] (後に [ei] を経て *I* [ai]) も参照。
- 8) **e zweiter Vater** : ここでは他動詞 *han* (=haben) の対格 (= 4 格) 目的語ではあるが、標準ドイツ語とは異なり、複数および中・女性に倣って男性・単数であっても冠詞等で南部アルザスでは主格が対格 (逆に北部アルザスでは対格が主格) の機能を引き継ぐことで形態的区別をなくしてしまった。標準ドイツ語の“*einen zweiten Vater*“ に該当する。

### 日本語訳

マリーゲレは [教会に] 告解 (懺悔) に行き、牧師に妊娠したと報告します。

—「哀れな罪びとよ、あなたは少なくともその子供の父親はいるのですか？」

—「どうぞご心配なさらないでください、牧師様。すべては予期したとおりなのですから。

それに、もし双子が生まれても、すでに二番目の父親もキープしてありますよ。」

### 7. **D'r Justin<sup>1</sup> hat sinere Tochter Olga d'r Wage<sup>2</sup> g'lehnt,**

(Justin hat seiner Tochter Olga den Wagen geliehen,

**fir<sup>3</sup> e Spritztour mit ihre Kollegine z'mache<sup>3</sup>.**

um einen Spritztour mit ihren Kolleginnen zu machen.)

**Wu's am Owe<sup>4</sup> wider<sup>5</sup> heim kummt<sup>6</sup>, so sait's strahlend<sup>7</sup> zu sim Vater;**

(Wenn sie am Abend wieder nach Hause kommt, so sagt sie [mit] strahlend[em Gesicht/ -er Stimme] zu seinem Vater)

<<Was ich noch **han welle sage<sup>8</sup>**, Pape:

(Was ich noch habe sagen wollen, Papi:

**dü brüchsch<sup>9</sup> dine Versicherung vum Wage das Jahr nit ummesunscht zahle<sup>9</sup>!>>**

(du brauchst deine Versicherung vom Wagen dieses Jahr nicht umsonst zu zahlen.)

{S. 209 oben}

注

- 1) **D'r Justin** : 男性名。上部ドイツ語諸方言では人名でも定冠詞を伴うのが普通。
- 2) **d'r Wage** : 標準ドイツ語の対格 (= 4 格) den Wagenに相当。アレマン方言では語末の -n は脱落する。南部アルザス語では単数・男性・主格の定冠詞 d'r は対格 (= 4 格) としても用いられる。これに対し北部アルザスでは語末の -r- が脱落した de (< der) が主格として用いられている。
- 3) **fir ... z' +不定詞** : 標準ドイツ語の“um ... zu + 不定詞”と異なり、アレマン諸方言では目的を示すzu不定詞句の補文標識として前置詞 fir, fer (=標準語 für) を用いる。これは北欧語 (デンマーク語 for at+不定詞 等), 英語方言 (for to +不定詞) とも共通する。
- 4) **am Owe** : 標準ドイツ語の am Abendに相当。南部アルザス語では閉鎖音 -b- は Leben > Låweのように母音間で唇歯摩擦音 -w- [v] へと変化する。
- 5) **wider** : 意味的に標準ドイツ語の wiederに相当。綴りが同じ前置詞の wider ではないので注意。
- 6) **heim kummt** : アルザス地方を含むドイツ語圏南部では“帰宅する“を意味する慣用句において標準ドイツ語の nach Hauseの代わりに heim (=英語 home) を用いる。
- 7) **strahlend** : ここでは“mit strahlendem Gesicht“ または „mit strahlender Stimme“の意味と解釈した。
- 8) **han welle sage** : 完了形式における過去分詞としての機能を持つ話法の助動詞の代用不定詞 (下線部) の位置は標準ドイツ語とは異なり (haben sagen wollen) 本動詞の不定詞 (sage)に先行する。
- 9) **brüschsch ... +不定詞** : アルザス語の動詞 brüsch (=標準語 brauchen ... zu + 不定詞) は、他の多くのドイツ語諸方言および日常語と同様に zu を取らない。

日本語訳

ユスティンは娘のオルガに同僚と一緒にドライブをするために車を借りました。夕方になってオルガが帰宅すると、顔を輝かせて (または: 朗々とした声で) 彼女は父親に言います。「パパ。私ね、まだ言いたかったことがあるんだけど。今年は車の保険, 無駄に支払わなくてもいいみたいよ。」

8. 'S Buob Annelise<sup>1</sup> isch emol<sup>2</sup> in e Pizzéria gange<sup>3</sup>,

(Buob Annelise ist in eine Pizzeria gegangen.)

b'stellt sich dert e Pizza un wartet, bis die kummt.

(bestellt sich dort eine Pizza und wartet, bis die kommt.)

Wu<sup>4</sup> d'rno<sup>5</sup> d'r Koch die Pizza uf d'r Tisch<sup>6</sup> bringt, so frog<sup>7</sup> r:

(Wie dann der Koch die Pizza auf den Tisch bringt, so fragt er:)

— Madame, muess<sup>7</sup> ich'se in vier oder in sechs Portione schnid<sup>8</sup>?

(— Madame, muss ich sie in vier oder sechs Portionen/Stück(e) schneiden?)

— Nur in viere, Monsieur: sechs Sticker<sup>9</sup> wàre<sup>10</sup> mir z'vil!

(— Nur in vier, Monsieur: sechs Stück [稀に Stücke] wären mir zu viel! )

{S. 186 mitten}

### 注

- 1) **'S Buob Annelise** : 。アレマン方言では尊敬を込めて女性名を用いる場合には中性名詞扱いとされ定冠詞を伴う。またアルザスでは日本語と同様に“姓+名”の順で呼ばれる。ルクセンブルクと同様に姓はドイツ語系であるが名前はフランス語であることが多い。
- 2) **emol** : 標準ドイツ語の *einmal* に相当。標準ドイツ語の *ein* はアレマン方言では語末の *-n* は脱落し語幹母音も弱化して *e [ə]* となる。
- 3) **gange** : 標準ドイツ語の *gegangen* に相当するが、アルザス語では過去分詞の標識としての接頭辞 *ge-* の文法化が完全に徹底しておらず、*kumme* (=標準語*kommen*)、*geh* (=標準語*gehen*) のように場所の移動を示す動詞の過去分詞には、中高ドイツ語と同様に接頭辞 *ge-* が付加されない。
- 4) **Wu** : 形態的に標準ドイツ語の *wo* に相当するが、南部アルザス語では一般に標準語の“*wenn*”の意味で用いられる。
- 5) **d'rno** : 形態的に標準ドイツ語の *darauf* に相当するが、南部アルザス語では一般に標準語の“*dann*”の意味で用いられる。
- 6) **uf d'r Tisch** : ここでは前置詞 *uf* (=標準語 *auf*) が場所の移動を示す対格 (= 4 格) を支配しているが、標準ドイツ語とは異なり南部アルザス語では、複数および単数の中・女性に倣って男性・単数であっても主格が対格の機能を引き継ぐことで形態的区別をなくしてしまった。標準ドイツ語の“*auf den Tisch*“に相当する。
- 7) **müess** : 中高ドイツ語の *muoz* (=新高ドイツ標準語 *muss*) に由来し、元来の二重母音 *-uo-* が *-ue-* [*uə*] と弱化している。uo > û の新高ドイツ語二重母音化の影響を受けてはいない。ただし *Zeidler/Crévenant-Werner* (S.111) によると、その音価は [*yə*]、とされている。
- 8) **schnide** : 中高ドイツ語の *sniden* (=新高ドイツ標準語 *schneiden*) に由来し、*î > ei* [*ai*] の新高ドイツ語二重母音化の影響を受けてはいない。
- 9) **sechs Sticker** : 標準ドイツ語の *Stück* は、南部アルザス語ではこの方言に特徴的な非円唇化 (*Entrundung*) により *Stïck* となるが、さらに、複数形語尾も標準ドイツ語とは異なる *-er* となる。
- 10) **wäre** : 形態的に標準ドイツ語の *wäre* (<中高ドイツ語 *wære*) に相当するが、中高ドイツ語の *æ* [*e:*] は南部アルザス語では調音点が下がり *à* [*a:*] となる。

### 日本語訳

ブオブ・アネリーゼはピザ店へ行き、そこでピザを注文し [運ばれて] 来るまで待っています。さて、コックがピザをテーブルへ持ってくると尋ねます。

—「奥様、ピザは4人前、それとも6人前にお切りいたしますでしょうか？」

—「4つでお願いします。6つだと私には多すぎるので。」

9. **E paar Tåg no<sup>1</sup> sinere Hochzitt<sup>2</sup> sàit<sup>3</sup> d' r Baum Gérard<sup>4</sup> zu sinere Fräuj<sup>5</sup>:**

(Ein paar Tage nach seiner Hochzeit sagt Gerhald Baum zu seiner Frau:)

— **Sag Martine, was blattersch<sup>6</sup> denn so nervös im Kochbüech<sup>7</sup> ummenand<sup>8</sup>?**

(— Sag Martine, warum blätterst du denn so nervös im Kochbuch um?)

— **Will<sup>9</sup> ich gâr<sup>10</sup> wisse mecht<sup>11</sup>, wie me<sup>12</sup> Herre-Hemder<sup>13</sup> wäscht<sup>14</sup>.**

(— Weil ich gerne wissen möchte, wie man Herrenhemden wäscht.)

{S.135, unten}

## 注

- 1) **no**: 標準ドイツ語の与格(= 3格) 支配の前置詞 nachに相当。語末の硬口蓋摩擦音 -ch [x] が脱落した語形。アルザス語では一般に標準ドイツ語の長母音[a:] は調音点があがって [o:] となることが多い。(例: Johr, Hoor, Owe 等)
- 2) **Hochzitt**: 基礎語の Zitt [tsit] (=標準ドイツ語 Zeit) は中高ドイツ語の単長母音 î [i:] を当初は維持したものの、後に二次的に短母音化した。
- 3) **sàit**: 形態・意味的に標準ドイツ語の sagtに相当するが、中高ドイツ語の縮約形 seit (<古高ドイツ語 segit) に基づき、後に南部アルザス語で語幹母音 -e- 調音点が下がって à [a] となったと考えられる。
- 4) **d' r Baum Gérard**: 男性名。上部ドイツ語諸方言では人名でも定冠詞を伴うのが普通。またアルザスでは日本語と同様に“姓+名”の順で呼ばれる。ルクセンブルクと同様に姓はドイツ語系であるが名前はフランス語であることが多い。
- 5) **Fräuj**: 形態・意味的に標準ドイツ語の名詞 Frauに相当。南部アルザス語の音声表記 -âuj の音価は [ai ~ oi] といったところか。これに対し北部アルザス語では標準ドイツ語とほぼ同じ [au] となる。(Zeidler/Crévenant-Werner, S.110)
- 6) **blattersch**: 形態・意味的に標準ドイツ語の動詞の定形 blätterstに相当。アレマン諸方言では倒置語順において主格代名詞 du (南部アルザス語では dü) は通常省かれる。
- 7) **Kochbüech**: 基礎語の Büech [byœx] (=標準ドイツ語 Buch) は中高ドイツ語の二重母音 uo を当初は維持したものの、後に二次的に前舌母音化した。
- 8) **ummenand**: 形態・意味的に標準ドイツ語の umeinanderに相当するが、スイス・ドイツ語 (例 Grüezi mitenand!) と同様に -ein- が -e- [ə] へと弱化し、さらに語末の語尾 -er が脱落する。
- 9) **will**: 形態・意味的に標準ドイツ語の従属の接続詞 weil (<中高ドイツ語 wîle =英語 while)に相当。中高ドイツ語の単長母音 î [i:] を当初は維持したものの、後にアルザス語で二次的に短母音化した。
- 10) **gâr**: 形態・意味的に標準ドイツ語の副詞 gern に相当するが、南部アルザス語で語幹母音 -e- の調音点が下がって à [a] となった。これに対して北部アルザスでは標準ドイツ語と同じ gernとなる。(Zeidler/Crévenant-Werner, S.59)
- 11) **mecht**: 形態・意味的に標準ドイツ語の副詞 möchte に相当するが、南部アルザス語では語幹母音の非円唇化と語末の曖昧母音 -e[ə] の脱落によって生じた語形。



- 12) **me** : 中高ドイツ語の不定代名詞 **man** の弱形 **men** [mən] がアレマン方言に特徴的な語末の -n の脱落により生じた語形。
- 13) **Hemder** : 意味的に標準ドイツ語の名詞の複数形 **Hemde** に相当するが、アルザス語では複数語尾の均質化・平準化により、中性名詞において最も頻繁に用いられる語尾 **-er** が用いられている。
- 14) **wäscht** : 標準ドイツ語の **wäscht** に相当。アルザス語を含む上部ドイツ語では、中高ドイツ語の強変化第6類および第7類に起源を有する動詞で、標準ドイツ語とは異なり直接法・現在・単数・2, 3人称形で語幹母音 **-a-** はウムラウトを生じさせない。

### 日本語訳

結婚式が済んで数日たって、ジェラルド・バウムは妻に言います。

「ねえマルチース。いったいどうしてそんなにイライラと料理の本をあっちこっちめくっているの？」

「だって、どうしたら男物のシャツが洗えるのか知りたいんだもん。」

#### 10. — Do meint eine [Fräuj] zu ihrem Mann:

(— Da meint eine [Frau] zu ihrem Mann:)

《**Weisch**<sup>1</sup>, **wurum dass**<sup>2</sup> immer weniger **Litt**<sup>3</sup> **hirote**<sup>4</sup>?

(Weisst du, warum immer weniger Leute heiraten?)

**Will**<sup>5</sup> d' junge **Männer**<sup>6</sup> **Angscht**<sup>7</sup> vor d'r Ehe **hân**.》

(Weil die jungen Männer Angst vor der Ehe haben.)

— **Àr meint uf das hi**<sup>8</sup>: 《**Zu minere Zitt**<sup>9</sup> isch alles **anderscht**<sup>10</sup> **g'seh**<sup>11</sup>.

(— Er meint auf das hin/darüber: Zu meiner Zeit war alles anders.)

**Ich, zum Bispühl**<sup>12</sup>, **hân vor d'r Hochzitt gar nit g'wisst**<sup>13</sup>, **was Angscht isch!**》

(Ich, zum Beispiel, habe vor der Hochzeit gar nicht gewusst, was Angst ist!)

{S.160, unten}

### 注

- 1) **Weisch** : 形態・意味的に標準ドイツ語の動詞の定形 **weist** に相当するが、[st] > [ft] > [[t] > [f] という音変化を経た語形。さらにアレマン諸方言では倒置語順では2人称・親称・人称代名詞 **dü** が定動詞の後で省略される。
- 2) **wurum dass** : 形態的にそれぞれ標準ドイツ語の **warum** と **dass** に相当する。アルザス語では従属文の後で補文標識として [d]ass が挿入されることが多い。
- 3) **Litt** [lit] : 形態・意味的に標準ドイツ語の複数名詞 **Leute** (<中高ドイツ語 **liute**[ly:tə]) に相当するが、アルザス語では南部・北部を問わず非円唇化 (**Entrundung**) が生じ、[li:t(ə)] となったが、**Zitt** [tsit] (=標準ドイツ語 **Zeit**) 等と同様に中高ドイツ語の単長母音 **î** [i:] は二次的に短母音化した。
- 4) **hirote** : 標準ドイツ語の動詞の不定詞 **heiraten** に相当するが、アレマン方言として中高ド

イツ語の単長母音  $\hat{i}$  [i:] を保持した上、語末の -n の脱落を受けた語形。

- 5) **will** : 形態・意味的に標準ドイツ語の従属の接続詞 *weil* (<中高ドイツ語 *wile* =英語 *while*)に相当。中高ドイツ語の単長母音  $\hat{i}$  [i:] は後にアルザス語で二次的に短母音化し、それを明示するために後続子音 l を重ねたと考えられる。
- 6) **Männer** : 標準ドイツ語の名詞の複数形 *Männer*に相当するが、南部アルザス語で語幹母音 -ä- [ɛ] の調音点が下がって à [a] となる。(Zeidler/Crévenant-Werner, S.107)
- 7) **Angscht** : 形態・意味的に標準ドイツ語の動詞の定形 *Angst* に相当するが、語末の子音群が [st] > [ft] という音変化を経た語形。
- 8) **uf das hi** : 標準ドイツ語の慣用句 "auf<sup>4</sup> ~ hin (~に関して)"に相当する。
- 9) **Zitt** : 上記の注3) を参照。
- 10) **anderscht** : 形態・意味的に標準ドイツ語の副詞 *anders* に相当するが、標準ドイツ語の *selbs* > *selbst*, *eins* > *einst* のように、二次的に -t が追加された後、さらに -st > -scht [ft] の音変化を被ったと考えることができる。
- 11) **g'seh [ks̩i:]** : 機能的に標準ドイツ語の過去分詞 *gewesen* (<中高ドイツ語 *gewēsen*) に相当するが、アルザス語の語形は、むしろ中高ドイツ語の過去分詞の異形態 *gesîn* に由来し、二次的にアレマン方言としての -n の脱落を伴ったもの。なお語幹母音 -eh- の音価はZeidler/Crévenant-Wernerでは開音の i [i] と閉音の e [e] の中間音とされており、 $\hat{i}$  の表記が推奨されている (S.106)。ここではこの音をあらわす音標文字として便宜的に [i:] をもちいるが、Willenbacher のこの音を示す表記には一貫性がなく、省略符号 (') の有無を別にしても *g'seh*, *g'si* と二通りの表記で揺れている。
- 12) **zum Bispühl** : 形態・意味的に標準ドイツ語の *zum Beispiel* に相当するが、*Beispiel* は中高ドイツ語の *bî-spil* に遡る。Zeidler/Crévenant-Werner (S.106) では、おそらく標準ドイツ語との連携をより強く保つためと思われるが、表記 *ie* [i:] を推奨しているのに対して、Willenbacher は語源的に根拠のない -ie- を避けるのと同時に、i の長母音としての性質を明示するための長音記号として標準ドイツ語に倣った -h- を用いているようだ。
- 13) **g'wisst** : 形態的に標準ドイツ語の過去分詞 *gewusst* に相当するが、動詞 *wisse* (=標準語 *wissen*) は、アルザス語では語幹母音の均質化・平準化により完全に弱変化に移行している。

### 日本語訳

—ある時、妻が夫に言います。「ねえ、どうしてだんだん結婚する人が減っているの知っている？ 若い人たちが結婚を怖がっているからなんだって。」

—それについて夫が言います。「僕の頃は何もかもが違っていたな。たとえば僕なんか結婚する前は何が怖いかわからなかったもん。」

### 11. Am Flughafen Basel-Milhüse, bi dr Autobahn, s[ch]teht e junge Dame

(Am Flughafen Basel-Mulhouse, bei der Autobahn, steht eine junge Dame)

un macht Autostop — Dr Bernard haltet<sup>1</sup>, die Dame s[ch]tigt i<sup>2</sup> un schu geht's los,

(und macht Autostopp —Bernard hält, die Dame steigt ein und schon geht's los,)

**Direktion Milhüse. Unterwägs merkt àr, dass die Person so scheene<sup>3</sup> Knie hat**

(Richtung Mulhouse. Unterwegs merkt er, dass die Person so schöne Knie hat)

**un zeigt ... Àr kat<sup>4</sup> nit widers[ch]teh und legt sine Hand uf die Knie.**

(und zeigt ... Er kann nicht widerstehen und legt seine Hand auf die Knie.)

**Do sàit die Dame pletzlig<sup>5</sup>, mit're liewe, sanfte S[ch]timme. «Psalm 439».**

(Da sagt die Dame plötzlich mit einer lieben, sanften Stimme „Psalm 439“.)

**Ganz verschrocke<sup>6</sup> nimmt dr Bernhard sine Hand awàg<sup>7</sup> un sàit sich: 1**

(Ganz erschrocken nimmt Bernard seine Hand weg und sagt sich:)

**«Was hat die jetz gsàit! Psalm 439!**

(«Was hat die jetzt gesagt! Psalm 439!)

**Dü, Alterle<sup>8</sup>, wenn die vu de Psalme redt, so isch's e Schweschter!»**

(Du Alter, wenn die von den Psalmen spricht, so ist's eine Schwester!)

**D'Fahrt geht widderscht<sup>9</sup>, unter Wägs sàit die Person noch e Paar Mol uf'me**

(Die Fahrt geht weiter, unterwegs sagt die Person noch ein paar Male auf/in einem)

**vorhaltungsvolle Ton «Psalm 439».**

(vorhaltungsvollen Ton «Psalm 439».)

**Andlig sin'se z'Milhüse akumme<sup>10</sup>. Am Bahnhof ladet<sup>11</sup> dr Bernard sine «Dame» ab<sup>11</sup>,**

(Endlich sind sie in Mulhouse angekommen. Am Bahnhof lädt er seine Dame ab,)

**Fahrt<sup>12</sup> uf'm schnällsichte Wäg heim<sup>12</sup>, nimmt e Biwel,**

(fährt auf dem schnellsten Weg nach Hause, nimmt eine Bibel,)

**Süecht<sup>13</sup> dr Psalm 439<sup>14</sup> ... un list:**

(sucht den Psalm 439... und liest:)

**«Mein Sohn, du bist auf dem richtigen Weg, gehe weiter ...»**

(«Mein Sohn, du bist auf dem richtigen Weg, geh weiter...»)

{S.181 unten}

## 注

- 1) **hältet** : 標準ドイツ語のhältに相当。アレマン方言を含む上部ドイツ語では、中高ドイツ語の強変化第6類および第7類に起源を有する動詞で、標準ドイツ語と異なり直接法・現在・単数・2, 3人称形で語幹母音 -a- はウムラウトを生じさせない。さらに、3人称においては語尾 -t の前に -e- [ə] を挿入する点でも標準語とは異なっている。
- 2) **s[ch]tìgt ì** : 標準ドイツ語の分離動詞 steigt ... einに相当。標準ドイツ語の分離動詞の接頭辞 ein- は中高ドイツ語 inの強勢形 [i:n] に基づき、新高ドイツ語の二重母音化を経たもの。一方、中高ドイツ語の直接の後裔であるアレマン方言では語末の -n が脱落して i [i:] となる。
- 3) **scheen** : 標準ドイツ語の schön に相当するが、アルザス語では非円唇化 (Entrundung) により scheen [ʃe:n] となる。

- 4) **kāt** : 標準ドイツ語のkannに相当するが、南部アルザス語では他の動詞からの類推により一部の話法の助動詞の3人称・単数・現在で語尾 -t が付加される。
- 5) **plätzlig** : 標準ドイツ語の plätzlich に相当するが、アルザス語では非円唇化 (Entrundung) により ö [œ] > e [ɛ] となる。さらに標準ドイツ語の接尾辞 -lich はアルザス語では通常 -lig として再現されている。
- 6) **verschrocke** : 標準ドイツ語の接頭辞 er- は、南部アルザス語ではよく ver- で置き換えられることが多い。ここでも形態的には標準ドイツ語の erschrocken に相当する。
- 7) **awäg** : Martin/Lienhard (II, S.801) の e<sup>n</sup>wäg [əwæk] に相当するが実際の音価に近い表記が用いられたと考えられる。その語源はおそらく hinweg ([h]inweg > e[n]weg > aweg) であろう。
- 8) **Alterle** : 形容詞の男性名詞化 Alter に指小辞 -le が付加された形態で、"Kamerad, Freundchen" を意味し、冗談やお世辞で呼び掛ける際に用いられる。(Martin/Lienhard, I, S.35) ここではもちろん自分自身に対する呼び掛けとして用いられている。
- 9) **widderscht** : Martin/Lienhardには該当する語形はないが、副詞的機能を持つようになった属格(=2格)語尾 -s が中高ドイツ語 wid[d]er (=新高ドイツ語 wieder)に付加された後に、標準ドイツ語の selbs > selbst, eins > einst のように、さらに二次的に -t が追加された後、-st > -scht となったと考えることができる。
- 10) **akumme** : 標準ドイツ語の angekommen に相当。過去分詞の標識としての接頭辞 ge- の文法化が完全に徹底しておらず、kumme (=標準語kommen), geh (=標準語gehen) のように場所の移動を示す動詞の過去分詞には、中高ドイツ語と同様に接頭辞 ge- が付加されない。
- 11) **lädet ... ab** : 標準ドイツ語の lädt... ab に相当。ウムラウトを伴わない語幹母音 -a- と語幹と人称語尾 -t の間に挿入される -e- [ə] に関しては、上記1) の注を参照せよ。
- 12) **fahrt ... heim** : 標準ドイツ語の fährt ... nach Hause に相当。
- 13) **süecht** : 標準ドイツ語の sucht に相当。中高ドイツ語の suochen に由来し、語幹の元来の二重母音 -uo- が前舌母音化しただけでなく、二重母音の後半部も [ə] と弱化している。従って uo > û [u:] への新高ドイツ語二重母音化の影響を受けてはいない。
- 14) **Psalm 439** : 旧約聖書に詩篇 4 3 9 は存在しない。ここはあくまでもジョークということ。

### 日本語訳

バーゼル-ミュルーズ空港の高速道路のそばで若い女性が立ってヒッチハイクをしています。ベルナルは車を止めるとその女性は車に乗り込んできて、さっそくミュルーズ方面に向かって出発します。途中で彼はこの女性がとっても美しい膝をしていて隠してもいないことに気がつきます。彼は我慢できなくなって彼女の膝を手で触ってしまいます。(←直訳：自分の手を彼女の膝に置いてしまう。)するとその女性は突然愛情のこもったやさしい声で「詩編 4 3 9」と言います。ベルナルはとっても驚いて自分の手を離すと、自分に向かって言います。「今この女はなんて言ったんだ！詩編の 4 3 9 だって！ おいおい、詩編のことを言ったのだった」

たら、この人はシスター（修道女）だ！」ドライブは続きます。途中でこの女性はさらに何度か咎めるような調子で「詩編 4 3 9」と言います。ついに二人はミュルーズに着きます。駅で彼はその女性を降ろすと、いちもくさんに家へ帰って、聖書を取り出し詩編の 4 3 9 番を捜し出して読みます。「わが子よ、汝は正しき道を歩んでいる。そのまま歩み続けなさい！」と

## 12. D'Madam Pfäffer trifft<sup>1</sup> d'Madam Essig i' me G'schäft.

(Madam (=Frau) Pfeffer trifft Madam Essig in einem Geschäft.)

### Schu wird geplaudert

(Schon wird geplaudert:)

— Was han'i erfahre, Madam Essig, eier<sup>2</sup> Mann seig<sup>3</sup> im Bach vertrukne<sup>4</sup>?

(Was habe ich erfahren, Madam Essig, Euer (=Ihr) Mann sei im Bach ertrunken?)

— D'Versicherung hat mir fir dà Verluscht 12 Millione usbezahlt.

(Die Versicherung hat mir für den Verlust 12 Millionen ausbezahlt.)

— Was, 12 Millione fir e Mann, wu nit emol hat kenne<sup>5</sup> ràchne un schriwe?

(Was, 12 Millionen für einen Mann, der nicht einmal hat rechnen und schreiben können?)

— Jà, Madam Pfäffer... un schwimme hat'r oi nit kenne... zum Glick.)

(Ja, Madam Pfeffer... und schwimmen hat er auch nicht können... Zum Glück.)

{S.94 mitten}

## 注

- 1) **trifft** : 不定詞はアルザス語では traffe (=treffen) となる。現在時制の人称語尾変化 (=活用) は下記の通り。

不定詞 : traffe / 過去分詞 getroffe		
ich triff	mer	} traffe
dü triffsch	ihr	
àr trifft	se	

- 2) **eier** : 標準ドイツ語の所有代名詞 euer [œyɐ] の非円唇化した形態。
- 3) **seig** : 標準ドイツ語の接続法 1 式の sei にあたる。語形に冠しては.. を参照。
- 4) **vertrukne** : vertrinke (=ertrinken) の過去分詞で標準ドイツ語の ertrunken に該当する。一般に標準ドイツ語の説頭辞 er- はアレマン諸方言では低地ドイツ語と同様に接頭辞 ver-に置きかえられる傾向がある。但し, erfahre, erhohle, erkläre, erwarte, erwecke 等の少数の例外も存する。
- 5) **... hat kenne ràchne un schriwe** : 標準ドイツ語では ... hat rechnen und schreiben können に該当するが、代替不定詞の過去分詞の位置が異なり、アレマン方言では本動詞の不定詞の左に位置するのに対して、標準ドイツ語では文末になる。

## 日本語訳

プファッファー（胡椒）夫人とエッシッヒ（お酢）夫人がお店で出会います。さっそくお喋りが始まります。

「エッシッヒさん。何を聞いたと思う。あなたの旦那さんって、小川で溺れ死んだんですってね。」

「保険会社が私にこの損失に対して1,200万（フランス・フラン）も支払ってくれたの。」

「え!? 算数も国語もできなかった旦那さんに1,200万（フランス・フラン）もですって?」

「そうなんですよ、プファッファーさん。それに彼、泳ぐこともできなかったの。幸いに...。」

13. **D'r Arthur<sup>1</sup> frog si Pape: <Dü, was isch das, kalter Krieg?>**

(Arthur fragt seinen Papi: Du, was ist das, kalter Krieg?)

**Schu<sup>2</sup> fallt<sup>3</sup> d' Antwort:**

(Schon fällt die Antwort)

< **Weisch [dü]<sup>4</sup>, wenn ich als<sup>5</sup> mit dinere Mame Krach han...**

(Weisst du, wenn ich immer mit deiner Mami Krach habe,)

**No<sup>6</sup> will' se d'r Tag druff<sup>7</sup> nit koche!>**

(nun will sie den Tag darauf nicht kochen!)

{S.36 unten}

## 注

- 1) **D'r Arthur** : アルザス語を含む上部ドイツ諸方言では人名であっても通常は定冠詞と共に用いられる点で標準語とは大きく異なる。
- 2) **uf'm** : 形態的に標準ドイツ語の“auf dem”に相当する。アルザス語の前置詞**uf**は中高ドイツ語のûfに由来し、新高ドイツ語二重母音化の影響を受けてはいない。
- 3) **vu d'r** : 形態的に標準ドイツ語の“von der”に相当する。
- 4) **mairie (f) [məri, meri]** : フランス語で「市役所」の意味。
- 5) **als** : 意味的に標準ドイツ語の副詞 **immer** に相当し、ドイツ語圏南西部を代表する語彙である。
- 6) **no** : 意味的・形態的に標準ドイツ語の副詞 **nun** に相当。
- 7) **d'r Tag druff** : 意味的・形態的に標準ドイツ語の名詞対格の副詞的用法 **den Tag darauf** に相当。前述したように南部アルザス語では主格が対格の機能を引き継いだ。

## 日本語訳

アルトゥーアはパパに尋ねます。「ねえ，“冷戦”ってなあに？」

さっそく答えが返ってきます。「いいかい。パパがいつもママとけんかすると、ママは次の日料理を作ろうとしないってことだよ！」



14. **D'r Maurice isch e richtiger Casanova. Doletscht<sup>1</sup> hat'r schu wider mit'me**

(Mauritz ist ein richtiger Casanova. Zuletzt hat er schon wieder mit einem)

**Miggele<sup>2</sup> im Kino agebändelt<sup>3</sup>, und hat's in sine Garçonnière<sup>4</sup> gfehrt.**

(Mädchen im Kino angebändelt (,) und hat sie in seine „Garçonnière“geführt.)

**Spot in d'r Nacht hat das Mäidle vu ihm Abschid g' numme,**

(Spät in der Nacht hat dieses Mädchen von ihm Abschied genommen.)

**dr'no meint'r noch züe-n-m :**

(Dann meint er noch zu ihm:)

— **Wie wär's, wenn de<sup>5</sup> morn wider zu mir kämsch?<sup>6</sup>**

(— Wie wär's, wenn du morgen wieder zu mir kämest?)

**De kennstsch ja jetz d' Adress?**

(Du kennst ja jetzt die Adresse?)

— **Iwermorn, wenn de witt<sup>7</sup>.**

(— Übermorgen, wenn du willst.)

**Awer morn geht's nit... morn hirot'!**

(Aber morgen geht's nicht... morgen heirate ich!)

{S.124 unten}

注

- 1) **doletscht** : “つい先日” (letztthin)。詳細は第一話の注5)を参照。
- 2) **Miggele** : 本来は女性の名前 Madlene (マドレーヌ)の指小辞を伴った愛称形と考えられるが (Martin/Lienhart, Bd. I, S.650), ここでは便宜的に“女の子”(Mädchen)として訳した。
- 3) **agebändelt** : a|bändele の過去分詞。標準ドイツ語(口語)の an|bändeln と同様に前置詞 mit と共に用いられ, “~(異性)と親しくなろうとする”の意味。
- 4) **Garçonnière** : フランス語からの借用語で“独身者用アパート”のこと。
- 5) **de** : 2人称・敬称・単数・主格の人称代名詞 *dü* は, アクセントがおかれない場合 *de* [tə] と弱化する。
- 6) **kämsch** : 接続法2式で, 標準そいつ護の *kämest* に該当。“Wie wär's, wenn ...”は標準ドイツ語と同様に“...したらどうだろう”を意味する固定的表現。
- 7) **witt** : *welle* (=wollen) の現在時制の活用 (=人称語尾変化) は標準ドイツ語と比較すると少し煩雑である。

不定詞 *welle* / 過去分詞 *welle* (S.73 u./S.186 o.)

ich will	mir	}	<i>wänn</i>
dü witt	ihr		
är will	se		

日本語訳

モーリスは根っからの女たらしです。この間彼は、またしても女の子と映画館で恋仲になり、彼女を自分の独身者用ワンルームマンションに連れ込みました。夜遅くこの女の子は彼に別れを告げます。その時彼はさらに彼女に言います。

－「明日また、僕の家に来るっていうのはどう？ もう住所、知っているだろう？」

－「明後日で良ければね。でも明日はだめよ。明日は結婚式なんだから！」

15. **Strahlend maldet sich e junger Mann bim<sup>1</sup> Mura Nicole uf<sup>2</sup> m<sup>2</sup> Standesamt vu d<sup>3</sup>**

(Strahlend meldet sich ein junger Mann bei Mura Nicole auf dem Standesamt vom **Milhüser Mairie**<sup>4</sup>.

Mühlhausener Rathaus.)

－ **Madame, ich han e Sohn bekomme. So wird mindeschtens<sup>5</sup> unser Familiennamme**

(－ Madame, ich habe einen Sohn bekommen. So wird mindestens unser Familien-**nit**<sup>6</sup> üsstärwe<sup>7</sup>.

Name nicht aussterben.)

－ **Ich gratülier! Wie isch denn Ihre Namme?**

(－ Ich gratuliere! Wie ist denn Ihr Name?)

－ **Meyer!**<sup>8</sup>

{S.204 oben}

注

- 1) **bim**：形態的に標準ドイツ語の“beim”に相当する。標準ドイツ語とは異なり、アルザス語を含むアレマン方言では女性の名前は一般に中性名詞扱いとされるため、前置詞と中性・単数・与格（＝3格）の定冠詞との融合形が用いられている。
- 2) **uf**<sup>2</sup> **m**<sup>2</sup>：形態的に標準ドイツ語の“auf dem”に相当する。アルザス語の前置詞**uf**は中高ドイツ語の uf に由来し、新高ドイツ語二重母音化の影響を受けてはいない。
- 3) **vu d**<sup>3</sup>：形態的に標準ドイツ語の“von der”に該当する。
- 4) **mairie (f) [mɛri, meri]**：フランス語で「市役所」の意味。
- 5) **mindeschtens**：形態的に標準ドイツ語の“mindestens”に相当する。標準ドイツ語の語中の -st- は、アルザス語を含むドイツ語圏南西部では -scht- [ʃt] として現れる。
- 6) **nit**：標準ドイツ語の否定詞 **nicht** の語源は、“本来の否定詞 **ni** + 副詞 **io** + 名詞 **Wicht** の融合形”とされているが、アレマン方言では標準ドイツ語以上に縮約化が進み、語中の摩擦音 -ch- [x] が脱落している点でオランダ語 (**niet**)、英語 (**not**) に近い。
- 7) **üsstärwe**：形態的に標準ドイツ語の分離動詞“aussterben”に相当する。中高ドイツ語の後舌長母音 -u- [u:] は、南部アルザス語では前舌化して -ü- として表記される。
- 8) **Meyer**：アルザス地方においてマイヤー (Meyer) という姓は、東日本における“鈴木”姓と同様に最もありふれたものであり、希少性はまったくない。(Kunze, S.66)

日本語訳

顔を輝かせて若い男がミュルーズ市役所の戸籍局のミューラ・ニコル（人名）のところに申告をしに来ます。

— マダム。私に息子が生まれました。これで少なくともうちの名字は消えて無くなることはないでしょう。

— おめでとうございます！ あなたの名前はいったい何でしょうか。

— マイヤーですよ！

16. D'Familie Wäwer wohnt grad<sup>1</sup> näwe'm Salvatorpark.

(Die Familie Weber wohnt gerade neben dem Salvatorpark.)

**Alle sitze a'me Friejohrsowe vor d'r Télé. Nur 18 jährige Mireille geht**

(Alle sitzen an einem Frühjahrsabend vor dem Fernsehen. Nur 18 jährige Mireille

**efters an's Fänschter. Ändlig sait's:** {télé (f) [tele]: フランス語「テレビ」}

(geht öfters ans Fenster. Endlich sagt sie:)

— **Dà Film gefällt mir nit. Ich gang<sup>2</sup> e bizzi<sup>3</sup> iw're, in d'r Park.**

(— Der Film gefällt mir nicht. Ich gehe ein bisschen hinüber, in den Park.

**Dert pfiift<sup>4</sup> e Nachtigall so scheen!**

(Dort pfeift eine Nachtigall so schön!)

**No meint d'r Vater: <Vu mir üs! [Dü] kahsch<sup>5</sup> geh. Awer nimm d'Whisky-Flasche**

(Nun meint der Vater: <Von mir aus! Du kannst gehen. Aber nimm die Whisky-Flasche

**nie mit, wie s'letschte Mol, denn Nachtigalle trinke kei Schnaps!>**

nie mit, wie das letzte/vorige Mal, denn Nachtigallen trinken keinen Schnaps!>

{S.113 unten}

注

- 1) **grad**: 標準語の副詞 gerade の語中の語末の e [ə] の脱落した縮約形で、ドイツ語諸方言はもとより、日常語 (Umgangssprache) においても流布している語形。
- 2) **gang ... iw're**: 分離動詞 iw're | geh (=hinüber | gehen) より。分離の接頭辞 iw're の語構成は、標準語とは逆に"über + hin" に遡る。すなわち ü > i への非円唇化, 母音間の b > w への摩擦音化, 曖昧母音 Schwa [ə] の脱落により über > iw'r となったが, 一方 hin も, 語末子音 -n の脱落, 語頭の h- の脱落, そしてアクセントのない位置での i > e [ə] への弱化により成っている。なお, geh (=gehen) の現在時制の活用 (=人称語尾変化) も標準ドイツ語と比較すると少し煩雑である。

不定詞 *geh* / 過去分詞 *gange*

ich <i>gang</i>	mir	} <i>gehn</i>
dü <i>gehsch</i>	ihr	
âr <i>geht</i>	se	

命令形・単数: *gang!*

- 3) **e bizzì** : 第1話の注4)を参照せよ。なお, Martin/Lienhart では bitzi の表記を充てている (Bd. II, S.127)。
- 4) **pfiff** : アルザス語の pfiffe [pfi:fə] は中高ドイツ語の pfifen [pfi:fən] に直接に由来し, オーストリア (南チロルおよびケルンテン) に発する新高ドイツ標準語の î [i:] > ei [a<sub>1</sub>] への音変化を低地ドイツ語と同様に全く受けていない。
- 5) **ka[h]sch** : kenne (=können) の現在時制の活用 (=人称語尾変化) は, 標準ドイツ語と比較すると特に単数において縮約化が進行している。なお3人称・単数形 kat (=kann) においては, 他の一般的な動詞からの類推により人称語尾 -t が付加されている点に注意。

不定詞 kenne / 過去分詞 kenne		
ich ka	mir	} kenne
dü ka[h]sch	ihr	
àr kat	se	

### 日本語訳

ヴェーバーさん一家はサルヴァートル公園のすぐ隣に住んでいます。春のある夕方に皆がテレビの前に座っています。ただ18歳のミレイユだけは頻繁に窓辺へ行きます。ついに彼女は言います。

— この映画, 私は気に入らないわ。ちょっと向こうの公園に行ってくるね。

あそこでナイチンゲール (小夜啼鳥) がとっても美しく啼いているから!

その時, 父親は言います。「構わないよ! 行っておいで。でもこの間みたいに絶対にウイスキーの瓶は持っていくなよ! ナイチンゲールはシュナップス (火酒) なんて飲まないのだから!」

### 17. 'S Ursule<sup>1</sup> trifft d' Mamsell<sup>2</sup> Lisbeth vor' me<sup>3</sup> Blüemelade<sup>4</sup>.

(Ursula trifft Fräulein Elisabeth vor einem Blumenladen.)

— **Bouschour<sup>5</sup> Mamsell Ursule, grad<sup>6</sup> han ich<sup>7</sup> e Paar Blüeme b'schellt.**

(— Guten Tag Fräulein Ursule, gerade habe ich ein Paar Blumen bestellt.)

**Mine Nochber<sup>8</sup> fire<sup>9</sup> morn<sup>10</sup> ihre blächige Hochzitt<sup>11</sup>.**

(Meine Nachbarn feiern morgen ihre „blechige“ Hochzeit.)

— **Blächige Hochzitt!! Was isch das fir<sup>12</sup> e Fàscht?**

(— „Blechige“ Hochzeit!! Was ist das für ein Fest?)

**Vu dàm han ich noch nie nicks<sup>13</sup> g'heert<sup>14</sup>.**

(Von dem habe ich noch nie gehört.)

— **Jo, sie sin jetz 10 Jahr mitnander<sup>15</sup> g'hirote<sup>16</sup>,**

(— Ja, sie sind jetzt 10 Jahre miteinander geheiratet)

**un schu zeh<sup>17</sup> Jahr àsse se nur Konserve.**

(und schon zehn Jahre essen sie nur Konserven.)

{S. 153 oben}

注

- 1) **'S Ursule** : 原著では定冠詞の女性形を伴った“D' Ursule”となっているが、未婚女性の名前は一般に中性扱いとなり、必ず定冠詞を伴って用いられるため、正しくは „'S Ursule” となるはずである。
- 2) **Mamsell** : フランス語のMademoiselle からの借用語ではあるが、縮約 (Kontraktion) により2音節語に変質している。
- 3) **vor'me** : 中高ドイツ語の前置詞 vor と不定冠詞 einemeの融合形であり、標準ドイツ語の“vor einem”に該当する。“vor dem”の融合形ではないので注意が必要。
- 4) **Blüemelade** : 語幹母音 -üe- は中高ドイツ語の -uo- の前舌母音化したもの。また、Blüemeも Lade も語末の -nが脱落している。標準ドイツ語の“Blumenladen”にあたる。
- 5) **Bouschour [búfu:r]** : フランス語のBon jour! からの借用語。アクセントはゲルマン系のアルザス語風に第一音節に置かれる。
- 6) **grad** : 第15話の注1) を参照。
- 7) **han ich** : 中高ドイツ語の ich hân に直接に遡る。これに対し現代の標準ドイツ語の ich habe は他の動詞の活用 (=人称語尾変化) からの類推によるものと推測される。
- 8) **Nochber** : 形態・意味的に標準ドイツ語の Nachbar „ご近所の人, 隣人” にあたり、中高ドイツ語の nâch-[ge]bûre の異形態 nôchbûre にさかのぼる。
- 9) **fire** : 中高ドイツ語 vîren に直接に由来し、標準ドイツ語 feiern と異なりバイエルン = オーストリア方言に起源を有する新高ドイツ語の î [i:] > ei [ai] への二重母音化の影響をまったく受けてはいない。
- 10) **morn** : 中高ドイツ語の語中の -ge- が脱落した縮約形。
- 11) **Hochzitt** : 中高ドイツ語の Hôchzît [hó:x-tsi:t] „祝宴”の前後の語幹長母音は、アルザス語では共に短音化したのみならず、その意味も標準ドイツ語と同様に„結婚式”に限定された。
- 12) **fîr** : 中高ドイツ語の前置詞 für は南部アルザス語では非円唇化 (Entrundung) している。
- 13) **nie nîchs** : 形態対応上は標準ドイツ語の „nie + nichts“ にあたるが、意味的には二重否定 (=肯定) ではなく、中高ドイツ語と同様に単に“否定の意味の強調”である。
- 14) **g'heert** : これも南部アルザス語に広く観察される非円唇化であり、現在-過去-過去分詞の語幹母音の均質化 (すなわち現在時制の語幹母音 ö [ø:] の過去および過去分詞への波及) が図られた近世以降に生じたと考えられる。
- 15) **mitnander** : 標準ドイツ語の miteinander に該当するが、アルザス語では語中の -ei- が脱落した縮約形を示す。
- 16) **g'hirote** : 標準ドイツ語の過去分詞 geheiratet に該当するが、アルザス語ではいわゆる“口調の-e-”は残ったものの語末の -t は脱落した。なお新高ドイツ語の二重母音化の影響を蒙っていないため、中高ドイツ語の長母音 [i:] を保持している。
- 17) **schu zeh** : それぞれ標準ドイツ語の schon と zehnに該当するが、他のアレマン諸方言と同様にアルザス語では語末の -n が規則的に脱落した縮約形を示すので注意。

日本語訳

ウルジュールは花屋の前でリスベット嬢と出会います。

— こんにちは、ウルジュールさん。私はちょうど花を数本注文したところです。ご近所の方が明日[金婚式・銀婚式ならぬ]„ブリキ婚式“のお祝いをするので。

— „ブリキ婚式“ですって！！ そんなのこれまで一度も聞いたことないわ。

— ええ、あの人たち結婚して10年一緒に暮らしているのだけど、もう10年間も缶詰しか食べたことがないの。

18. **D'r Schangele<sup>1</sup> vu Sultz<sup>2</sup>, dà hat sich in d'Marine engagiert,**

(Hänsel von Sulz [, der] hat sich in die Marine engagiert.)

**un macht mit d'r «Jeanne d'Arc<sup>3</sup>» e Reis um d'Wält, wu<sup>4</sup> iwer<sup>5</sup> e Johr dürt<sup>6</sup>.**

(und macht mit der «Jeanne d'Arc» eine Reise um die Welt, die über ein Jahr dauert.)

**No<sup>7</sup> sechs Monet<sup>8</sup> bekommt' r<sup>9</sup> e Brief vum Annele<sup>10</sup>, sine Liebschte:**

(Nach 6 Monaten bekommt er einen Brief von Annele, seiner Liebsten:)

**«Liewer Schangele, das lange Warte, bis dü z'ruckkummsch,**

(Lieber Hänsel, das lange Warten, bis du zurückkommst,

**han ich nimm<sup>11</sup> kenne vertrage<sup>12</sup>.**

(habe ich nie vertragen können.)

**Drum han ich mit dim Pape g'hirote<sup>13</sup>.**

(Drum habe ich mit deinem Papa geheiratet.)

**Zwische dir un mir isch<sup>14</sup> also alles fertig. Blib g'sund! dine Mame»**

(Zwischen dir und mir ist also alles fertig. Blieb gesund! Deine Mama.)

{S. 156 oben}

注

- 1) **D'r Schangele** : Schang はおそらくフランス語の Jean (←ラテン語Johannes より) よりの借用語であり、それにアルザス語の指小辞の -ele (←ゲルマン語 -ila より) が付加されたものと考えられ、性別は男性となる(標準語ドイツ語の例: *Schlüssel*, *Ärmel*, *Flügel*, *Schlägel* 等)。
- 2) **Sultz** : 上部アルザス, ゲヴィレール (Guebwiller) 南東の町。フランス語表記では Sultz となる。
- 3) **Jeanne d'Arc** : „オルレアンの乙女”と称されたフランス救国の英雄で聖女。ただしここではフランス海軍の艦艇名称。
- 4) **wu** : アルザス語の不変化の関係代名詞(厳密には補文標識)で、ここでは1格 (=主格)の機能で用いられている。(他のアレマン諸方言では wo となることが多い。)
- 5) **iwer** : 形態上は標準ドイツ語の前置詞 über に該当するが、語頭音 ü- の非円唇音化と語中の両唇閉鎖音 -b- の -w- [v] への唇歯摩擦音化(共にアルザス語全域)を経た形態。
- 6) **dürt** : 中高ドイツ語 dûrn に直接に由来し、アルザス語として二次的に語幹母音 -û-



- [u:]の前舌母音化を経た形態。標準ドイツ語 *dauern* と異なり新高ドイツ語の二重母音化の影響を全く受けてはいない。
- 7) **No** : 形態上は標準ドイツ語の前置詞 *nach* に該当するが、語末の軟口蓋摩擦音 *-ch* [x] の脱落と、語幹長母音 [a:] の調音点の上昇による [ɔ:] への音変化を経た形態。
- 8) **Monet** : 中高ドイツ語 *mânôt* の異形態 *mônet* に由来し、アルザス語では単複同形となる。
- 9) **'r** : 人称代名詞 **är** (=標準ドイツ語 *er*) は時として前接的 (*enklitisch*) に *-r* として用いられる。
- 10) **Annele** : *Anna* (=フランス語 *Anne*) (←ラテン語 *Johanna* の縮約形より) に指小辞の *-ele* (← *-ila* より) が付加されたもので、性別は女性の名前の常としてアレマン方言では中性である点に注意。
- 11) **nimm** : 中高ドイツ語 *niemêr* の異形態 *nimmê* の語末音消失 (*Apokope*) を経た語形で、意味的に標準ドイツ語の“*nimmer, nie*”にあたる。
- 12) **kenne verträge** : 過去分詞としての機能を担う代用不定詞の語順は、ヴェンカー (*Wenker*) の言語地図からもその多様性がよく解ることではあるが、アルザス語では修飾する不定詞の直前に置かれる。これに対し標準ドイツ語では不定詞の直後となる (... *vertragen können*.)。
- 13) **g'hirote** : 標準ドイツ語の過去分詞 *geheiratet* に相当するが、アルザス語ではいわゆる“口調の *-e-*”は残ったものの語末の *-t* は脱落した。なお新高ドイツ語の二重母音化の影響を蒙っていないため、中高ドイツ語の長母音 [i:] を保持している。
- 14) **isch** : 中高ドイツ語の *ist* は、ドイツ語圏南西部 (主にアレマン諸方言) において *ischt* を経た後に語末音消失 (*Apokope*) により *isch* [ɪʃ] となった。これに対して東に隣接するバイエルン・オーストリア方言では *-t* の脱落は共通してはいるものの、*-s-* の口蓋化は生じていない。従って *isch/is* は上部ドイツ語に属する両方言を区別する最も明瞭な形態の一つとなっている。

### 日本語訳

ズルツ出身のシャンゲレは海軍に勤務していて、“ジャンヌ・ダルク号”で一年以上に及ぶ世界周航の旅をしています。半年たって彼は恋人のアンネレから手紙を受け取ります。「愛するシャンゲレ。あなたが帰ってくるまでいつまでも待っているなんて私はもう耐えられませんでした。それであなたのお父様と結婚してしまいました。つまり、あなたと私の間はすべて終わりなの。いつまでも元気でね！あなたのママより。」

### 19. 'S Kathi<sup>1</sup> isch mit sim Vélo<sup>2</sup> g'stirzt<sup>3</sup> un kummt in's Spital<sup>4</sup>.

(= Kathi ist mit seinem Fahrrad gestürzt und kommt ins Krankenhaus.)

### Dert<sup>5</sup> wird's<sup>6</sup> dur<sup>7</sup> e Dokter untersüecht<sup>8</sup>. Dà<sup>9</sup> notiert sine Diagnose in'e Büech<sup>8</sup>:

(=Dort wird sie von einem Arzt untersucht. Er notiert seine Diagnose in ein Buch.)

### «Nasebeibruch<sup>10</sup> Schlüsselbeibruch, Schirfung am Owerkerper<sup>11</sup>

(=Nasenbeinbruch, Schlüsselbeinbruch, Schürfwunden am Oberkörper)

**No frägt' r<sup>12</sup> «Wie alt isch Sie<sup>12</sup>, Madam?»**

(=Nun fragt er «Wie alt sind Sie, gnädige Frau?»)

— **Zwei-e-drissig, Herr Dokter!**

(=Zweiunddreißig, Herr Doktor!)

— **No geht d' r Dokter un schribt noch zu sinere Diagnose:**

(=Nun geht der Arzt und schreibt noch zu seiner Diagnose:)

**«Allem Aschîn no lidet d' Verletzte a' me starke G' dächtnisschwund!»**

(=«Allem Anschein nach leidet die Verletzte an einem Gedächtnisschwund!»)

{S. 79 mitten}

### 注

- 1) '**S Kathi** : 女性の名前はアレマン方言では中性扱い。常に中性・単数の定冠詞 's (← das より) とともに用いられる。
- 2) **Vélo** : “自転車”はスイス、ルクセンブルクと同様にフランス語からの借用語を用いている。(これに対して、ドイツとオーストリアでは Fahrrad となる。)
- 3) **g'stirzt** : 原文ではg'schirzt と記されているが、ここでは標準ドイツ語の表記に近い st- を用いる。なお語幹の短母音 -ü- は、アルザス語では非円唇化により -i- となる。
- 4) **Spital** : „病院”はスイス、ルクセンブルクさらにはオーストリアと同様にフランス語の Hospital からの借用語を用いている。その際、語頭の音節 Ho- の脱落を伴う。(これに対してドイツでは Krankenhaus または Klinik となる。)
- 5) **Dert** : アルザス語の語形は中高ドイツ語の副詞 dort の異形態 dert [dɔrt] に基づく。
- 6) 's : 人称代名詞 **às** (=標準ドイツ語 es) は時として前接的 (enklitisch) に -'s として用いられる。なおここで中性形が用いられているのは、女性の名前の '**S Kathi** 受けているため。
- 7) **dur** : アルザス語の語形は中高ドイツ語 durch の語末の軟口蓋摩擦音 -ch [x] が脱落した異形態に由来する。
- 8) **-üe-** : 中高ドイツ語の二重母音 -uo- は、アルザス語では前舌化により -üe- [yɔ] となる。
- 9) **Dà** : 指示代名詞 der の弱強勢形。
- 10) **Nasebeibruch** : 規定語 Nasebei は、本来の Nasenbein “鼻骨”のアレマン方言の特徴である -n が脱落した形態。
- 11) **Schürfunge am Owerkerper** : 低地アレマン方言はアレマン諸方言の中でも非円唇化 (Entrundung) が進んだ方言である。標準ドイツ語では Schürfunge, Oberkörper となる。
- 12) **frägt' r** : 原文では **frogt' r** となっているが、音価は後舌の暗い [ɑ:] または [ɒ:] のため、表記としては **â** が適切だと考える。
- 13) **Wie alt isch Sie?** : 2人称敬称の人称代名詞としては、旧来の Ihr と標準ドイツ語の影響を受けた新しい Sie が併存しているが、後者の人称語尾は標準ドイツ語の sind に由来する sin と並んで、3人称単数現在の isch も用いられ今なお定着していないようだ。
- 14) **Zweidrissig** : 中高ドイツ語の zwei und drîzec に基づくが、接続詞 und が弱体化して [ə] になっている。

### 日本語訳

カティーは自転車で転んで病院へ行きます。そこで彼女は医師の診断を受けます。医者はノートに診断結果をメモします。「鼻骨骨折、鎖骨骨折、上半身に擦傷」と。さて医者は「マダム（奥様）、お年はお幾つですか？」と尋ねます。「32歳です。先生！」そこで医者は診断書にさらにこう付け加えます。「どうみてもこの患者は強い記憶喪失に罹っている。」と。

#### 20. E Mame<sup>1</sup> verzehlt<sup>2</sup> in<sup>3</sup> ihrem kleine Techterle<sup>4</sup> e Märle<sup>5</sup>:

(Eine Mutter erzählt ihrem kleinen Töchterchen ein Märchen:)

— 'S isch emol<sup>6</sup> e scheene Prinzàsin g'sch<sup>6</sup> ...

(Es war einmal eine schöne Prinzessin ...)

— Mame, fange<sup>7</sup> alle Märle so ah<sup>7</sup>, mit «'S isch emol ...»?

(Mutti, Fangen alle Märchen so an, mit «es war einmal ...»?)

— Nei Kind, dim Pape sine Märle<sup>8</sup> fange so ah:

(Nein Kind, die Märchen von deinem Vati fangen so an:)

«Hinecht<sup>9</sup> kumm<sup>10</sup> ich speeter heim<sup>10</sup>. Unser Diräkter macht uns e Vortrag.»

(heute Nacht komme ich später nach Hause. Unser Direktor hält uns einen Vortrag.)

{S. 35 oben}

### 注

- 1) **Mame** : 標準ドイツ語の幼児語の Mami に基づく。
- 2) **verzehlt** : 標準ドイツ語の接頭辞 er- はアレマン諸方言において ver- に置き換えられることが多い。
- 3) **in** : 低地アレマン方言を含む上部ドイツ諸方言の特徴として、与格（3格）を示す標識として前置詞 in を用いる点が挙げられる。
- 4) **Techterle** : Tochter に指小辞の -(e)le (← -ila より) が付加されたもの。
- 5) **Märle** : Mär に指小辞の -(e)le (← -ila より) が付加されたもので、標準ドイツ語の Märchen “メルヘン・昔話” に相当する。
- 6) '**S isch emol ... g'sch** : 昔話の冒頭を飾る決まり文句で標準ドイツ語の “es war einmal ...” に該当するが、過去時制を一切消失してしまったアルザス語を含むアレマン諸方言では完了形式（下線部：標準ドイツ語の ist ... gewesen に該当）によってその代用としている。
- 7) **fange ... ah** : 標準ドイツ語の分離動詞 anfangen の接頭辞 an- は、アレマン諸方言では規則的な -n の脱落による代償延長 (Ersatzdehnung) で [a:] となるが、ここでは長母音を示すために標準ドイツ語で 16 世紀以降に導入された長音記号 -h を用いている。(例：ドイツ語 *Ha<sup>h</sup>n* ≠ オランダ語 *haan* とともに “雄鶏” の意味) (須澤・井出, S.162 f.)
- 8) **dim Pape sine Märle** : 他のドイツ語諸方言と同様、消失した属格（2格）の代用表現として “所有の与格（3格）+ 所有代名詞”（下線部）を用いる。なお **dim** は中高ドイツ語 *dīneme* が語中音省略 (Synkope) により *dīnme* となった後に、-nm- の同化 (Assimilation) を経て *dīme* となり、最後に語末音省略 (Apokope) と語幹母音の短音化によって **dim**

[dim]となったと考えられる。{s. W-E-M., S.19, §21}

- 9) **Hinecht** : 標準ドイツ語の heute (←古高ドイツ語 hiu tagu), heuer „今年“ (←古高ドイツ語 hiu jâru) と同様に hi- (ラテン語 *ci-tra* の ci- と同語源) + naht の融合形態であり, スイス・ドイツ語でも用いられている。
- 10) **kumm ... heim** : 標準ドイツ語で“帰宅する“を意味する nach Hause (kommen) は, 上部ドイツ語方言および日常語で英語の (go) home と同語源の heim およびその様々な異形態 (hoam, haam 等) により表現される。

### 日本語訳

ママが幼い娘にメルヘン (昔話) を語ります。「昔むかし美しいお姫様がおりました。・・・」  
 —「ママ, メルヘン (昔話) って, みんなそんな風に『昔むかし・・・』で始まるの?」  
 —「違うわよ。パパのメルヘン (昔話) はこう始まるの:『今日は帰りが遅くなるよ。うちの社長の訓辞があるんだ。』」

### 21. Am Stammtisch meint ein<sup>1</sup> zu sim<sup>2</sup> Kumpel:

(Am Stammtisch meint einer zu seinem Kumpel:)

➤ **D'r Doktor hat mir verbote, während'm Asse<sup>3</sup> ebbis<sup>4</sup> [z']<sup>5</sup> trinke.**

(➤Der Doktor/Arzt hat mir verboten, während des Essens etwas zu trinken.)

**Ich han Abhilf g'funde. Ich verzicht ewe<sup>6</sup> uf's Asse.<**

(Ich habe Abhilfe gefunden. Ich verzichte eben auf das Essen.<<)

{S.84 unten}

### 注

- 1) **ein** : 不定代名詞 ein は, 中高ドイツ語の形容詞の強変化の曲用を引き継ぎ, 単数の 1 格 (主格) では無語尾となっている。これに対して標準ドイツ語では無語尾は許容されず, 強変化語尾 -er 等が義務的なため, 単数・男性・1 格では **einer** となる。
- 2) **sim** : 中高ドイツ語の所有代名詞 (男性・3 格) *sîneme* の縮約形。
- 3) **während'm Asse** : 標準ドイツ語の 2 格支配の前置詞 während に該当するが, アルザス語ではほとんどのドイツ語諸方言と同様に 2 格が消失してしまったため, 3 格支配として用いられている。(この点では標準語の口語形態とも言える日常語 (umgangssprache) でも同じ。)
- 4) **ebbis** : 標準ドイツ語の不定代名詞 etwas [étvas] と同様に中高ドイツ語の *etewa3* に由来するが, 強勢のない音節における母音の弱化と, [v] の両唇音化の後に逆行同化によって -t->-b- へと変化したものと考えられる。
- 5) **[z']** : 原文では不定詞に添える **z'** (=標準ドイツ語 zu) が欠けていると考えられるため補った。
- 6) **ewe** : 形態的・意味的に標準ドイツ語の過去分詞 *eben* に相当する。標準ドイツ語の母音間の有聲閉鎖音 -b- は, 口語ではよく両唇摩擦音 [β] として発音される傾向があること

が指摘されている（シュービゲル, S.75, S.85）。アルザス語でもおそらく中間段階としての両唇摩擦音 [β] を経て唇歯摩擦音化し, -w- [v] と表記されるようになったと推測される。

### 日本語訳

[居酒屋の] 常連席である男が自分の同僚に言います。:

「医者が俺に, 食事中に[何かを]飲むのを禁じたんだ。

[だが,] 救済策を見つけたよ。まさに食事なしで済ますことにしたんだよ。」

(コメント: そうすれば酒が飲める!)

## 22. **Schüelmamsell**<sup>1</sup> [sait] zum Sébastien, **wo**<sup>2</sup> in dr Klasse hüeschtet:

(Die Schullehrerin sagt zu Sebastian, der in der Klasse hustet:

➤ Sébastien, **m'r**<sup>3</sup> nimmt d'Hand vor **s'Mül**<sup>4</sup>, wenn **me**<sup>5</sup> hüeschtet.

(➤ Sebastian, man nimmt die Hand vor den Mund/das Maul, wenn man hustet.)

**Ich bin sicher, dass das deine Grand'mama**<sup>6</sup> **oi**<sup>7</sup> so macht. <<

(Ich bin sicher, dass das deine Großmutter auch so macht. <<)

**Sébastien:** ➤ **Natirlig**<sup>8</sup> **müesst**<sup>9</sup> das mine **Mémé**<sup>10</sup> mache... **sunscht verliert'se s'Gebiss.** <<

(Sebastian: ➤ Natürlich muss das meine Oma machen... sonst verliert sie das Gebiss. <<)

{S.16 oben}

### 注

- 1) **Schüelmamsell**: 規定語は中高ドイツ語の *schuole* に基づき, アルザス語としての *uo* > *üe* への前舌母音化を示している。基礎語はフランス語の *Mademoiselle* からの借用語である。
- 2) **wo**: アレマン方言を特徴づける不変化の関係〔代名〕詞。ここでは主格の機能で定動詞 *hüeschtet* の主語である。
- 3) **m'r**: 不定代名詞 *man* はアレマン方言では規則的に語末の *-n* が脱落して *me* となったが, *ebber* (=jemand) 等他の不定代名詞からの類推によりさらに語尾 *-r* が付加されたとされる。同形・同音となる人称代名詞の1人称・複数・主格形 *mer, m'r* (=wir) とは混同されやすいので注意。
- 4) **s'Mül**: 形態的・意味的に新高ドイツ標準語の *das Maul* に相当する。共に中高ドイツ語の *mül* を起源としているが, アルザス語は *û* [u:] > *ü* [y:] への前舌母音化を, 新高ドイツ標準語ではバイエルン方言に起源を有する *û* [u:] > *au* [au] への二重母音化を示している。
- 5) **me**: 不定代名詞 **m'r** の弱強勢形。上記の注3) を参照。
- 6) **Grand'mama**: フランス語の口語 *grand-maman* “おばあちゃん”より。
- 7) **oi**: 中高ドイツ語の二重母音 *ou* はアルザス語では一般に *auj* または *âuj* で表記されるが (例: *Frâuj, blåuj* 等), *Zeidler/Crévenat-Werner* (S.110)によるとその音価は前半部が暗い曖昧な *a* 音とされているため, 表記としては *âuj* [âi] または [pi] が良いと考えられる。こ

れに対して中高ドイツ語の **ouch** (=標準ドイツ語 **auch**) のみは上記の注4で述べた語末の **-ch** [x] の脱落を伴うのみならず、その音価も **oi** [oi]となるようだ。

- 8) **Natirlig** : 標準ドイツ語の接尾辞 **-lich** はアルザス語では通常 **-lig** として再現されている。  
 9) **müessſ** : 標準ドイツ語の **muss**に相当するが、南部アルザス語では他の動詞からの類推により一部の話法の助動詞の3人称・単数・現在で語尾 **-t** が付加される。  
 10) **Mémé** : フランス語の口語で幼児語の **mémé**“おばあちゃん”より。

### 日本語訳

学校の女の先生がクラスの中でくしゃみをしたセバスティアンに言います。

「セバスティアン、咳をするときには口に手を充てるのよ。あなたのおばあさんもそうして  
 るってこと、私もよく知っているのだから。」

セバスティアン：「もちろん婆ちゃんはそうしなければならないんだよ。じゃないと入れ歯、失くすからね。」

### 23. Die beide sitze uf' **me**<sup>1</sup> Bänkle<sup>2</sup> und natir**lig**<sup>3</sup> sàit àr kei Wort.

(Die beiden sitzen auf einem Bänkchen, und natürlich sagt er kein Wort.)

**obwohl dass**<sup>4</sup> àr bis **iw**<sup>5</sup> beide Ohre in das Mäidle verliebt isch.

(obwohl er bis über beide Ohren in das/dieses Mädchen verliebt ist. )

**Do** nimmt 's **Lili**<sup>6</sup> d' Initiative un meint:

(Da nimmt Lili die Initiative und meint:)

**-Roger, sag mir doch e siess**<sup>7</sup> Wort!

(- Roger, sag mir doch ein süßes Wort!)

**Àr** nimmt **si**<sup>8</sup> ganze Courage **zämme**<sup>9</sup> un sàit: **-Pudding-**

(Er nimmt seine ganze Courage zusammen und sagt: -Pudding-)

{S. 113 oben}

### 注

- 1) **'me** : 中高ドイツ語の不定冠詞の中性・男性の3格(与格) **eineme** (= **einem**) は、アルザス語では前置詞と融合した場合に **-me** と短縮される。  
 2) **-le** : アルザス南部では、指小辞は **-le** となる。  
 3) **-lig** : 標準ドイツ語の接尾辞 **-lich** は、アルザス語では **-lig** として現れる。  
 4) **obwohl dass** : 標準ドイツ語とは異なり、アルザス語では従属接続詞の後に補文標識としての **dass** が挿入される。  
 5) **iw** : 第18話の注5)を参照せよ。  
 6) **'s Lili** : 女性の名前はアレマン方言では一般に中性名詞として扱われる。  
 7) **siess** : 中高ドイツ語の円唇前舌二重母音 **-üe-** は、南部アルザス語では非円唇化して **-ie-** として表記される。  
 8) **si** : 中高ドイツ語の所有代名詞 (=所有冠詞) **sîn** (>新高ドイツ語 **sein**) は後に性・数に



よる格語尾 (-e 等)を伴わない限り, アレマン方言圏では一般に語末の語尾 -n が脱落し si となる。

- 9) **zämme**: 形態的・意味的に新高ドイツ標準語の副詞 **zusammen**に相当する。その起源となった中高ドイツ語の **ze samene**は, アレマン方言圏では一般に縮約 (Kontraktion) と同化 (Assimilation) により **z'samne** を経て **zämme** となったと推測される。

### 日本語訳

二人が小さなベンチの上に座っています。男の子は女の子にぞっこん惚れ込んでいるのに、もちろん一言も言いません。そこでリリーが主導権を取りこう言います。

「ロジェ, ねえ, 私に甘い言葉を言って!」

彼は全身の勇気を振り絞って言います。

「プリン」と…。

### 24. Dass mir Elsässer mit de **Finesse[s]**<sup>1</sup> vu dr franzeesche Sproch **nit**<sup>2</sup> immer

(Dass wir Elsässer mit den „**Finesses**“<sup>1</sup> von der französischen Sprache nicht immer **mitkumme, bewist folgende G'schichte:**

mitkommen, beweist [eine]folgende Geschichte:)

**E Mann, wu**<sup>3</sup> ganz sälte in dr Kirch a z' traffe **g'si isch**<sup>4</sup>, kummt vum Begräbnis

(Ein Mann, der ganz selten in der Kirche anzutreffen war, kommt vom Begräbnis

**vu-me Klassekamrad heim**<sup>5</sup> un sàit zu sinere Frau:

von einem Klassenkamerad nach Hause und sagt zu seiner Frau:)

— **Hasch dü g'wisst**<sup>6</sup>, dass dr **Christus g'hirote g'si isch**<sup>4</sup>?

(Hast du gewusst, dass der Christus geheiratet war?)

— **Das isch mir nei. Bis jetzt han ich nur immer g'heert, dass'r ledig g'si isch**<sup>4</sup>.

(Das ist mir neu. Bis jetzt habe ich nur immer gehört, dass er ledig war.)

— **Das han ich oi g'meint, awer während dr Predig hat dr Pfarrer schtändig**

(Das habe ich auch gemeint, aber während der Predigt hat der Pfarrer ständig

**vum «Jesus et sa grande Clemence» g'redt**<sup>7</sup>.

von «Jesus und seine große [Tochter] Clemence» geredet.)

{S.95 f.}

### 注

- 1) **Finesse[s]**: フランス語のFinesse[s]の借用語で, “微妙な言い回し”の意味。
- 2) **nit**: オランダ語 (niet) や英語 (not) と同様に, 語中の軟口蓋摩擦音 -ch- [x]が消失している。
- 3) **wu**: アルザス語を含むアレマン諸方言では関係〔代名〕詞として不変化のwo (アルザスではwu)を用いる。この起源については熊坂 (S. 169 ff.)を参照。
- 4) **g'si isch**: 上部ドイツ語方言は16世紀には動詞の直説法・過去時制形を消失してしまっ

たが、その完遂度に関してはアレマン方言と東に隣接するバイエルン＝オーストリア方言とでは異なり、前者はwar, hatte をも含め完全に消失した結果、war は **g'si sin** (=gewesen sein) として、また hatte は **g'ha han** (=gehabt haben) として完了形式で表現されるのに対し、後者では例外的に war, hatte は残存する。(例 ウィーン方言：Muatterl war a Weanerin.)

- 5) **heim**：標準ドイツ語で“帰宅する”を意味する nach Hause (kommen) は、上部ドイツ語方言および日常語で英語の (go) home と同語源の **heim** およびその様々な異形態 (hoam, haam 等) により表現される。
- 6) **g'wisst**：標準ドイツ語の wissen (過去wusste/過去分詞gewusst) とは異なり、アルザス語の wisse (過去：消失/過去分詞g'wisst) は語幹母音も含め完全に弱変化動詞となっている。
- 7) **g'redt**：アルザス語では動詞の語幹が歯音 -t, -d で終わる場合に、本来の過去分詞の語尾 -et の t のみ脱落するが (例：g'rischte =gerüstet), 例外的に **rede** のみは過去分詞形が (\*g'rede ではなく) **g'redt** となる。

### 日本語訳

我々アルザス人は、フランス語の微妙な言い回しがいつでも何とか分かるわけではないということをお話の証明している。

めったに教会で会うことのなかった男が、クラスメートの葬式から帰ってきて妻に言います。「キリストが結婚していたって知っていた？」

「それって、初めて聞いたわね。今まではいつもキリストは独身だったとしか聞いていなかったけど。」

「そう僕も思っていたんだ。でも説教の間、牧師/司祭はずっと『イエスと彼の年長の娘クレマンズ』と言ってたよ。(メモ：本来“その大いなる恩寵”と理解すべきところ、,,クレマンズ“とは娘の名前だと勘違いした。)

### 25. **Wu<sup>1</sup> vor e paar Jahr d'r Pabscht<sup>2</sup> no<sup>3</sup> Milhüse kumme<sup>4</sup> isch,**

(Als vor ein paar Jahren der Papst nach Mulhouse/Mühlhausen gekommen ist,)

**so sin<sup>5</sup> Hunderte yu<sup>6</sup> Mensche üs' m<sup>7</sup> Badische un üs d'r Schwiz dert ane<sup>8</sup> g'wandert,**

([so] sind Hunderte von Menschen aus dem Badischen [Land] und aus der Schweiz dorthin gewandert,)

**unter andere oi<sup>9</sup> e paar Schweschtere üs'me Kloschter bi Lugano<sup>10</sup>.**

(unter anderen auch ein paar Schwestern aus einem Kloster bei Lugano.)

**Un wer<sup>11</sup> traffe die in Milhüse? Ihre friehjere<sup>12</sup> Seelsorger.**

(Und wen treffen die/sie in Mulhouse? Ihren früheren Seelsorger.)

**Da frogt d'rno<sup>13</sup> d'Ower-Schweschter:**

(Der/Er fragt dann die Ober-Schwester:)

—— **Sie han aber e grossi Reis müesse mache<sup>14</sup> bis dohi.**

(Sie haben aber eine große Reise machen müssen bis dahin.)

**Sin Sie iber d' r Sankt Bernardino<sup>15</sup> g' fahre?**

(Sind Sie über den Sankt Bernardino/Bernhard gefahren?)

**Um Gotteswille, Herr Pfarrer, was Sie aber nüt sage!<sup>16</sup>**

(— Um Gotteswillen, Herr Pfarrer, was Sie aber nicht sagen!)

**— Mir han wohl g' merkt [b]im [Hi]kumme<sup>17</sup>, dass mir iber ebber<sup>18</sup> g' fahre sin,**

(Wir haben wohl gemerkt beim Hierherkommen, dass wir über jemand[en] gefahren sind,)

**aber han mir kenne wisse<sup>19</sup>, dass's e Heiliger isch!?**

(aber haben wir wissen können, dass es ein Heiliger ist!?)

{S.207 oben}

注

- 1) **wu**: 従属の接続詞として標準ドイツ語の“als, wenn または口語 wie”の意味で用いられる。(ただし、不変化の関係代名詞としても使用されるので注意。)
- 2) **Päbscht**: 形態的・意味的に新高ドイツ標準語の名詞 **Papst**に相当する。ドイツ語圏南部では閉鎖音の p も b も共に無声で発音され、その違いは硬音 (Fortis: p) と軟音 (Lenis: b) であるとされる (シュービゲル, S.74)。ただこの場合硬音と軟音の違いを意識した上での表記かどうかは疑わしい。一般的には標準ドイツ語に倣った表記が推奨されよう。さらに語末の子音群 -st> -scht [ʃt]の音変化は、ドイツ語圏南西部で広く観察されるものである。
- 3) **no**: 形態的・意味的に新高ドイツ標準語の前置詞 **nacht**相当する。語末の軟口蓋摩擦音 [x] はアレマン諸方言では脱落することが多い。また中高ドイツ語の長母音 [a:] は、調音点が上がって [o:] となる。ただしアルザス語を含むドイツ語圏南西部では地名の前に置かれる方向・目的を示す前置詞は一般に **uf** (=標準語 **auf**) であることから、この場合の **no** (=nach) は標準ドイツ語からの干渉ではないかと考えられる。
- 4) **kumme**: 中高ドイツ語と同様にすでに完了相の意味を持つ動詞には過去分詞において接頭辞 **ge-** が付加されない。すなわち標準ドイツ語と異なり、**ge-** の文法化が徹底していない。さらに標準ドイツ語の **kommen/gekommen** の語幹母音が中部ドイツ語方言に基づくのに対し、アルザス語ではアレマン諸方言に共通の語幹母音 **-u-** を持つ。また語末の鼻音 **-n** が規則的に脱落するのもアレマン諸方言の特徴である。
- 5) **sin**: 直接に中高ドイツ語の **sîn** [si:n] に由来する。従って標準ドイツ語の **sein** [zain] と異なり、低地ドイツ語と同様にバイエルン方言起源の新高ドイツ語二重母音化の影響を受けてはいない。
- 6) **vu**: 標準ドイツ語の前置詞 **von** に相当するが、前出の注 4 と同様にアレマン方言の特徴である語幹母音 **-u-**、および鼻音 **-n** の語末音省略 (Apokope) を示している。
- 7) **üs'm**: 標準ドイツ語では前置詞 **aus** と定冠詞 **dem** の融合形は不可能であるが、アルザス語では問題ない。
- 8) **ang**: 標準ドイツ語の “hin “に意味的に対応するアレマン方言形であり、語源的には前置詞 **an** の後に副詞 **hin** が付加され融合したものである。高地ドイツ標準語とは異なり、

- 一般に上部ドイツ語諸方言では副詞 *hin*, *her* は前置詞の後に付加されるが、その際に語頭音 *h-* と語末音 *-n* を消失する。(例：標準ドイツ語 *hinaus* ≠ バイエレン方言 *aussi*)
- 9) **oi**：中高ドイツ語の *ou* はアルザス語では一般に *auj* で表記されるが(例：Frauj, blauj 等), *ouch* (=標準ドイツ語 *auch*) のみは上記の注4で述べた語末の *-ch* [x] の脱落を伴って *oi* として表れる。
  - 10) **Lugano**：スイス南部のティツィーノ州最大の都市であり、チューリヒ、ジュネーヴに次ぐスイス第3の金融の中心地。
  - 11) **wer**：南部アルザス語では、主格 (= 1格/Nominativ) が対格 (= 4格/Akkusativ) の機能を引き継いだため、疑問代名詞においても *wer* が標準ドイツ語の対格形 *wen* の代わりに用いられる。
  - 12) **friehj**：中高ドイツ語の形容詞 *vrüejer* (> 新高ドイツ標準語 *früher*) は、アルザス語において非円唇音化 (*Entrundung*) により *-ie-* となった。
  - 13) **d'rno**：形態的には標準ドイツ語の “*danach*” にあたるが、一般的にアルザス語では標準ドイツ語の “*dann*” の意味で用いられる。
  - 14) **müesse mache**：助動詞の過去分詞 (= 代用不定詞/Ersatzinfinitiv) の語順は、標準ドイツ語とは異なり不定詞の前に位置する。
  - 15) **d'r Sankt Bernardino**：スイス西部フランス語圏の “グラン・サン・ベルナル [Grand San Bernard] 峠” のこと。フランス皇帝ナポレオン1世や古代カルタゴの将軍ハンニバルがイタリア遠征の途上に冬場に超えたことで有名。
  - 16) **was Sie aber nüt sage**：標準ドイツ語では “*Was Sie aber nicht sagen*” となり、「本当にあなたが言っているわけではないこと」の意味となろう。
  - 17) **[b]im [Hi]kumme**：意味的に標準ドイツ語の “*beim Hinkommen*” にあたる。[ ]の中は訳者による校訂。
  - 18) **ebber**：*etwas* の男性形である中高ドイツ語の *etewer* に由来し、まず唇摩擦音から両唇摩擦音への変化で *et(e)wer* > *etber* となった後に、次いで逆行同化により *etber* > *ebber* と変化したものと考えられる。意味は “*jemand*” にあたる。
  - 19) **kenne wisse**：上記の注14と同様に助動詞の過去分詞 (= 代用不定詞/Ersatzinfinitiv) の語順は、標準ドイツ語とは異なり不定詞の前、すなわち左側に位置する。

### 日本語訳

数年前にローマ法王がミュルーズにおいてになった時、何百という人々がバーデン地方やスイスからこの地にやってきました。[その中には] とりわけルガーノ近郊の修道院の数名の修道女たちもいました。そして、彼女たちはミュルーズで誰にであったのでしょうか？ [それは] 彼女たちの以前の司牧者でした。彼はその時に尼僧長に尋ねます。

「あなたたちはここまで本当に大変な旅をなさねばなりませんでしたね。サン・ベルナルディーノ (= グラン・サン・ベルナル [Grand San Bernard] 峠) を越えていらしたのですか？

(メモ：修道女たちは「聖ベルナルディーノを轢いてしまったのですか？」と誤解した!!)

「とんでもない、司祭様。何ってことをおっしゃるのですか！ こちらにやって来る時、確

かに私たちは誰かを轢いてしまいました、それが聖人様だと知ることができたでしょうか!？」

26. **Zwei Herre<sup>1</sup> dischkütiere<sup>2</sup> iwer d'Geischerwält<sup>3</sup>.**

(Zwei Herren diskutieren über die Geisterwelt.)

— Sie wänn<sup>4</sup> doch nit welle behaupte, dass Sie an d'Hächse glauwe?

(— Sie wollen doch nicht behaupten, dass Sie an die Hexen glauben?)

— Was, nit ... ich bin sogar mit einere g'hirote.

(— Was, nicht ... ich bin sogar mit einer [Hexe] geheiratet..)

{S. 91 unten}

注

- 1) **Herre**: 新高ドイツ標準語の名詞の複数形Herrenに相当するが、低地および高地アレマン諸方言では語末の -n は一般に消失する。
- 2) **dischkütiere**: -st->-scht- [ft] と同様に -sk->-schk- [jk] もドイツ語圏南西部に特徴的な音変化である。さらにアルザス語では動詞の直接法・現在の複数語尾は人称にかかわりなく統一語尾 -e (中部では -a)となる。
- 3) **Geischerwält**: 新高ドイツ標準語の名詞 Geisterweltに相当する。-st- >-scht- [ft] のドイツ語圏南西部の音変化に関しては第一話の注2)を参照。
- 4) **wänn**: 意味的に新高ドイツ標準語の助動詞 wollenに相当する。中高ドイツ語の直説法・現在・複数・3人称の活用形wellent は、後にシュヴァーベン方言を含む広義のアレマン方言で複数・1, 2人称にも侵入したが、さらに語中の -lle- が脱落して went という語形を生みだした(Weinhold-Ehrismann-Moser, § 150, § 160)。これがアルザス語で語幹母音 -e- [e] の調音点の下降と語尾 -t の脱落により現在の wänn [van] を生みだしたと想定できる。
- 5) **an d'Hächse glauwe**: 中高ドイツ語の動詞g(e)loubenの両唇閉鎖音 -b- は、アルザス語では -w- と摩擦音化しているが、“存在を信じる”という意味では標準ドイツ語と同様に前置詞 an +対格を取る。なおHächse は標準ドイツ語の Hexen にあたる複数形である。
- 6) **mit einere**: 後に名詞 Hächse を補って考える。
- 7) **g'hirote**: 第21話の注13)を参照せよ。

日本語訳

二人の男性が霊の世界について議論しています。

—まさか魔女[の存在]を信じているなんて言うつもりはないだろうね？

—なんだって、[そんなこと]ないよ...。それどころかその一人と結婚しているのだから。

27. **E Kunde geht in'e Garage un verlangt,**

(Eine Kunde geht in die Garage und verlangt,)

**dass me<sup>1</sup> ihm dr rächte verdere Pneu<sup>2</sup> wächsel.**

(dass man ihm den rechten vorderen Reifen wechselt.)

**Dr Garagischt betrachtet 's Rad un frogt:**

(Der Garagist betrachtet das Rad und fragt:)

— **Hatt Ihne ebber<sup>3</sup> mit'm Mässer<sup>4</sup> dr Pneu so verschnitte?**

(— Hatt Ihnen jemand mit dem Messer den Reifen so verschnitten?)

— **Nei, ich bin iwer<sup>5</sup> e Flasche g'fahre.**

(— Nein, ich bin über eine Flasche gefahren.)

— **Ja, hätte-n-ih<sup>6</sup> däre Flasche<sup>7</sup> nit kenne üswiche<sup>8</sup>?**

(— Ja, hättet ihr der Flasche nicht ausweichen können?)

— **Nei, da, wu<sup>9</sup> mir unter dr Wage g'loff<sup>10</sup> isch, hat<sup>11</sup> se im Sack g'ha<sup>11</sup>.**

(— Nein, der [Mann], der mir unter den Wagen gelaufen ist, hatte sie im Sack.)

### 注

- 1) **me** : 中高ドイツ語の不定代名詞 *man* の弱形 *men* [mən] がアレマン方言に特徴的な語末の *-n* の脱落により生じた語形。
- 2) **dr rächte verdere Pneu** : アルザス南部では、標準ドイツ語の *e* [ɛ] は *à* [a] として表われる。また *verder* は *vorder* の異形態 *vörder* に由来する。(Martin/Lienhart, Bd. I, S. 140)
- 3) **ebber** : 上記第25話の注18) を参照。
- 4) **mit'm Mässer** : 新高ドイツ標準語の „mit dem Messer“ に相当するが、標準ドイツ語では前置詞 *mit* と冠詞 *dem* の融合形は不可能であるが、アルザス語では問題ない。
- 5) **iwer** : 第23話の注5) を参照せよ。
- 6) **hätte-n-ih** : スイス・ドイツ語と同様にアルザス語でも母音連続 (Hiatus) を回避するために *-n-* が挿入される。]
- 7) **däre Flasche** : 新高ドイツ標準語の指示代名詞、単数・女性・3格 (与格) の *der* [de:v] は、南部アルザス語では *däre* または *dära* となる。
- 8) **hätte ... kenne üswiche** : 助動詞の過去分詞 (=代用不定詞/Ersatzinfinitiv) の語順は、標準ドイツ語とは異なり不定詞の前、すなわち左側に位置する。
- 9) **da, wu ...** : 新高ドイツ標準語の „derjenige, der ...“ に相当する。
- 10) **g'loff** : 新高ドイツ標準語の過去分詞 „gelaufen“ に相当するが、強変化第2類への類推からすでに中高ドイツ語期に *geloffen* という別形が生じたが、アルザス語の語形はこれに遡ると考えられる。
- 11) **hat ... g'ha** : 標準ドイツ語の *hatte* は、アルザス語では総合時制としての過去形が完全に失われてしまったため、分析的に“完了形式”によって示される。なお、北部アルザス語では „het ... ghet“ となる。

### 日本語訳

お客が自動車修理工場へ行き、右前輪のタイヤを交換してくれるよう求めます。



修理工はタイヤを見て尋ねます。

— 「誰かにナイフでタイヤを傷つけられたのですか？」

— 「いいえ。ピンを踏んだのですよ。」

— 「そのピンをよけることはできなかったのですか？」

— 「だめでした。私の車の下を走っていた人が袋の中に持っていたものなので。」

## 参考文献

### I. 欧文文献

- Dörig, Urs: Schweizerdeutsch für alle — Die 1000 wichtigsten Wörter plus Redensarten — Kommentare — Witze. Buchs (Sidus-Verlag) 2004
- Finck, Adrien: „Elsässische Literatur - 20. Jahrhundert“. Strasbourg (Édition SALDE) 1990
- Finck/Weckmann/Winter: In dieser Sprache — Neue deutschsprachige Dichtung aus dem Elsass. Hildesheim · New York (Olms Presse) 1981
- Hennig, Beate: Kleines Mitteldeutsches Wörterbuch. Tübingen (Max Niemeyer Verlag) 2001<sup>4</sup>
- Keller, R.E.: „German Dialects — Phonology and Morphology with selected Texts“, Manchester University Press 1961
- Kunze, Konrad: dtv-Atlas Namenkunde — Vor- und Familiennamen im deutschen Sprachgebiet. München (Deutscher Taschenbuch Verlag) 2003<sup>4</sup>
- Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. Leipzig (S. Hirzel Verlag) 1980<sup>36</sup>
- Lösch, Hellmut: „Zweisprachigkeit in Elsass und Lothringen — gestern, heute und auch morgen? Versuch einer Bilanz“, Wien (Edition Praesens) 1997
- Martin, E./Lienhart, H.: Wörterbuch der elsässischen Mundarten, 2. Bde. (Photomechanischer Nachdruck). Berlin/New York (Walter de Gruyter) 1974
- Meyer, Kurt: Schweizer Wörterbuch — So sagen wir in der Schweiz. Frauenfeld/Stuttgart/Wien (Verlag Huber) 2006
- Philipp, Marthe/Bothorel-Witz: Low Alemannic. Schwarz, Christian: Die "tun"-Periphrase im Deutschen — Gebrauch und Funktion. Saarbrücken (VDM Verlag Dr. Müller) 2009
- Sitzler, Susann: Aus dem Chuchichäschtli geplaudert — Das ultimative Sprach-lexikon für die Schweiz. Zürich/München (Pendo Verlag) 2008
- Suter, Rudolf: Baseldeutsch-Grammatik. Basel (Christoph Merian Verlag) 1976  
Baseldeutsch-Wörterbuch. Basel (Christoph Merian Verlag) 1984
- Troxler-Lasseaux, Sylvie/Nouvelle, Catherine/Schmitt-Troxler, Evelyne: J'apprends l'alsacien avec Tommy et Louise. Éditions du Bastberg 2003
- Weinhold-Ehrismann-Moser: Kleine mittelhochdeutsche Grammatik. Wien-Stuttgart 1972.
- Willenbacher, Freddy: D'Làchkür vum Profässer Fläscheputzer — sine 500 beschte Witz. Strasbourg (Éditions La Nuée Bleue) 2003
- Zeidler, Edgar/Crévenat-Werner, Danielle: Orthographe alsacienne — Bien écrire l'alsacien de Wissembourg à Ferrette. Jérôme Do Bentzinger Editeur 2008

B. URL

Noth, Harald: „Alemannisches Dialekthandbuch vom Kaiserstuhl und seiner Umgebung — eine Kaiserstühler Alemannische Sprachlehre auf der Grundlage der Mundart von Oberrotweil“, Freiburg i.Br. 1993  
 Verein zur Förderung der Landeskunde an Schulen e. V (Hrsg.v.): „Breisgauer Alemannische Kurzgrammatik“, Freiburg 1996  
 ([http://www.noth.net/m11\\_kurzgrammatik.htm](http://www.noth.net/m11_kurzgrammatik.htm))

C. 邦文文献

M. シュービゲル (小泉保 訳) 『音声学入門』大修館書店1973年  
 ウージェーヌ・フィリップス (右京頼三 訳) 『アルザスの言語戦争』白水社 1994年  
 金子 亨 『アルザス語の現在』 „ドイツ語研究 1 (クロノス1985年)” 所収  
 熊坂 亮 『スイスドイツ語 — 言語構造と社会的地位』北海道大学出版会 2011年  
 蔵持 不三也 編 『フランス・国境の地アルザス』社会評論社 1990年  
 トラッドギル, P. (土田滋 訳) 『言語と社会』岩波書店 1977<sup>2</sup>年  
 田中 泰三 『スイスのドイツ語』クロノス 1985年  
 須澤 通/井出 万秀 『ドイツ語史 — 社会・文化・メディアを背景として』郁文堂 2009年  
 中本 真生子 『アルザスと国民国家』晃洋書房 2008年  
 フレデリック・オッフエ (右京頼三 訳) 『アルザス文化論』みすず書房 1987年